

おいでよ魔導国

うぞうむぞう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作11巻でドワーフ王国から帰ってきたらきつとこの位話が進んでいるだろう、と予想してその後の続きを書いています。

魔導国に加入した現地人視点で進みます。

ナザリツク勢もたまにメインになります。

※独自設定、捏造設定あり

目次

帝国の守護者	1
魔導国の冒険者	9
帝国の騎士	17
幕間―諸国の人々	24
竜王国の女王	31
帝国の騎士 2	41
王国の吸血姫 1	53
王国の吸血姫 2	63
王国の吸血姫 3	74
王国の吸血姫 4	85
王国の守護者 1	95

帝国の守護者

ドワーフの王国より戻ってから一週間。アイنزズは慌ただしい日々を送っていた。

ドワーフ王国より齎される新しいルーン武具、集まってきた冒険者と訓練所の作成、デミウルゴスに任せた聖王国。そして、バハルス帝国属国の件など考えなければならぬことは多かった。

そんなある日、アイنزズはエ・ランテルの執務室で来訪者を待っていた。扉の側には本日のメイド番であるフィースが控えている。

ヌルヌル君に餌をあげているとドアがノックされ、フィースが来訪者の名を告げる。

「アイنزズ様、アルベド様とデミウルゴス様です」

アルベドとデミウルゴスが入室し、それぞれが深々とお辞儀すると挨拶の口上を述べる。

「おはようございます、アイنزズ様」

「うむ。おはよう、アルベド、デミウルゴス。デミウルゴスは、この忙しい時期に呼び戻してすまなかつたな」

「勿体なきお言葉……このデミウルゴス、お呼びとあらば、いついかなる時にも御身の前に駆けつける所存に御座います。」

ですが、聖王国の方は大体片付きまして、今はドツペルゲンガーと部下に任せております。回復の為のトーチャーが少々不足しておりますが、今のところ大きな問題は無いため御気遣い頂く必要は御座いません」

控え目な返答であったが、デミウルゴスの表情には満足気な笑みが浮かんでいた。

アイنزズは頷くと報告にあった聖王国の件を思い出す――

――ヤルダバオト率いる数千もの悪魔の軍勢は、聖王国の王都および周辺都市を襲撃し、一夜にして陥落せしめた。下位の悪魔を倒す冒険者もいたそうだが、デミウルゴス配下の魔将が召喚したものであり、ナザリックの損害はゼロとのことだった。捕らえた王族や軍人、冒険者、その他多くの国民は、王都に作った巨大な牧場に従事させて

いるという。そこからナザリックに運び込まれた皮は、既に数万にも及んでいた。

襲撃の目的はいくつかある——デミウルゴスからこっそり聞き出したのだが——皮や資産を奪いナザリックのものとする事、周辺国家に対し強い恐怖を与えることだ。

襲撃を派手に見せることで、ヤルダバオトの存在はバツチリ知れ渡っている。周辺国家は無視できず、何らかの対応に迫られるはず——特に動いて欲しいのは法国だ。

また、国家に限らず強い個人——プレイヤーが討伐しにくるかもしれないが、いざとなればドツペルゲンガーを切り捨てれば良い。

(やはり優秀な部下に任せの方がうまくいく……上司は黙って見守れば良いのだ。それにしても——捕らえた人間を牧場で働かせるとは、さすがはデミウルゴス。

羊の皮を剥ぐなど、不器用なアンデッドでは務まらんからな)

ふと、部下の職場風景を見てみたい衝動に駆られたが、ヤルダバオトとのマッチポンプがばれると面倒だと思ひ直し、本題に入ることにする。

「ところで、お前たちを呼んだのは他でもない。帝国のことなのだが——」

ナザリック地下大墳墓の近郊を五台の馬車が進んでいる。その中の一際豪華な馬車に乗るバハルス帝国の皇帝——ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスは、自らの側近たちと共にナザリックへと向かっていた。

「陛下、陛下は魔導国が提示してきた属国化の条件をどう考えてます？」

正面に座る帝国四騎士の一人、”雷光”バジウッド・ペシユメルが不安そうに尋ねてくる。

彼が本当に気にしているのは条件に書かれていないことであろう。

「……提示された条件は事細かではあるが、無理なことはない。むしろ想像していたよりも遥かに受け入れ易いものだ。ただ一つ、帝国の

支配者——いや、私の今後について一切触れていないことだけが不安だがな」

提示された条件にはジルクニフについて何も記述されていなかった。魔導国からの話によれば、ジルクニフの処遇については魔導王と直接会ったときに決める、とのことだった。

正に今日がジルクニフにとって運命の日といえるであろう。初めて魔導王に会ったときから続いている胃痛は、日に日にその強度を増し、今や最高潮に達していた。

ちなみに頭頂部にできた禿げも同様に成長しているが、頭を下げる機会が無いため幸いにも他人に知られることはなかった……。

「……皇帝陛下と呼ばれるのも今日までかもしれないな。バジウツド、今までよく仕えてくれた。感謝する」

「え、縁起でもないことを言わないでくださいよ！ 俺は陛下にどこまでもお供しますぜ！」

ジルクニフはくたびれた表情を隠さず、視線を外に向け溜息をつく。

「地位を剥奪され放逐されるならまだ良い。法国密談の件がバレたことを考えると処刑される可能性もある。最悪は……アンデツドとされ、未来永劫傀儡となつて帝国を支配するのに使われることも考えられる。そうなつた場合もお前はそんなことが言えるのか？ ——無理をするな。お前にも家族がいよう。」

バジウツドは何かを言おうとして何度も口を開くが、その思いは言葉となることはなかった。

気まずい空気が漂い始めた頃、ジルクニフが乗る馬車に一人の騎兵が近寄ってきた。

「陛下、まもなく到着いたします。入り口にはメイドが一人いるとのことです」

「……そうか」

声を掛けたのは帝国四騎士の一人、”重爆”レイナース。今回志願してきたため連れてきたのだが、彼女は以前から魔導国へ行きがたがっているような素振りを見せていた。もし彼女が帝国を離れることに

なったとしたら……いや、どうでもいい。なるようになれ、だ。謁見後のことなど考えても意味はない。

闘技場での一件以降、ジルクニフは皇帝という地位すら煩わしいと思うほど憔悴していた。

そして今回の謁見だ。あの強大な存在達の前に出るなど……誰かに替わるものなら替わって欲しかった。

相変わらず心配そうな顔をしているバジウツドを横目に、力なく手を振るとジルクニフは馬車を降りた。周りを見渡せば以前訪れたときと変わらない風景、そして……ログハウス前には1人の美しいメイドがいる。記憶の中からユリ・アルファという名前を思い出す。

「ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクスである。アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下にお目通り願いたい」

「お待ちしております。アインズ様の準備はお済になっているとのことですので、早速ですがご案内いたします」

(まさしく神話の世界だな……これ程の力を見せられておきながら、なぜ抵抗することを選んだのか)

ジルクニフはナザリツク地下大墳墓の九階層を進みながら、過去の自分の愚かさに自嘲的な笑みを浮かべた。後ろを振り返れば皆圧倒的な美の世界を前に呆然としたまま、音をたてないように歩いている。

今回連れてきた者は——以前ここまで来なかったレイナースを除けば——ほとんど変わらない。この後に続く恐怖を知っているからこそ、無意識に先の事を考えないようにしているのかもしれない。

(……で引き返せないかな……)
そんなことは不可能だと、理解していながらも心の中でそつと呟く。

やがて、大きな扉の前に着く。ゆつくりと扉が開いていき……予想通りの圧倒的な恐怖が風のように吹き付けてきた。

(未だ私はバハルス帝国の皇帝。ここが私の最期の場合だとしても——

いや、最期だからこそ貧相な姿は見せてはならぬ)

精神防衛のマジックアイテムを握りしめ、胸を張り正面を向く。見渡せば居並ぶ異形の者たち、その奥の階段下に控える階層守護者と呼ばれる者たち、玉座の脇に控える腰から羽を生やした美女、そして——玉座に座るアインズ・ウール・ゴウン——魔導王。

圧倒的な力の嵐の中、ジルクニフは歩き出す。この場こそ、己の最期の戦場であると決心を固め進む。

ジルクニフはゆっくりと歩を進めた。やがて階段下まで辿り着くと跪き口を開く——前に魔導王が語りかける。

「——よくぞ参られた、ジルクニフ殿。挨拶は不要。貴殿の立ち位置が曖昧なままでは挨拶にも困ろう。

早速だが、その件を決める前についてひとつはつきりさせねばならぬことがある」

ジルクニフは魔導王をまつすぐに見つめ、何を言われても即答できるように雑念を振り払う。

「率直に言おう。当初、私の考えでは帝国を使って大義名分の下、魔導国を建国する。その後帝国には正義を行う魔導国に歯向かう悪の連合を組織してもらおう。我々は悪の連合を一網打尽し、連合に与した国を残らず併合する——予定であった」

ジルクニフは思考——呼吸も停止し、顔色が真っ青になっていく。魔導王の言った通り、魔導国を建国させ対魔導国の大連合を作るのが当初の目的だった。

しかし、それすらも魔導王の手の内だった、そう言われたのだ。

魔導王は邪悪に嗤う。ジルクニフはこれから何を言われるのか、頭をフル回転させ可能性を考えた。

「二応確認しただけだ、気に病む必要は無い。私がそうするように仕掛けたのだから——とところでジルクニフ殿、貴殿はこの場で私に”友になろう”と言ったな」

言った。魔導王の顔を直視しないようにジルクニフは頭を下げ、震えながらも返す言葉が見つからない。心なしか、視線が自分の頭頂部に集まっているような気がする。

「……先ほど、私は帝国を利用する予定だったと言ったが、貴殿からの友の提案を受け入れたことにより方針を変えた。余程の事が無い限り私は一度決めたことを覆すことはしない。私が友であることを受け入れたのであれば、貴殿を今も友だと考えている」

ジルクニフには魔導王が言っていることが理解できなかった。友になる話を提案したのは、拒絶されることを前提に、交渉を有利に進めるための一手に過ぎなかったのだから。

それに……魔導王が心底自分のことを友というのであれば、なぜ自分は今これ程までに追い詰められているのか？ 全て自分の被害妄想であったというのか？

——そんなはずはない。それではなぜ、あのタイミングで、帝国の闘技場で法国との会談の場に現れたのだ？ 私を潜在的な敵として、ずっと監視していたからではないか？

否定的な意見がいくつも湧いてくるが、そんなジルクニフの心境などお構い無しに魔導王が続ける。

「だからこそ、帝国の闘技場で”私の敵にはなるな”という意思表示をしたつもりだ。私の友であれ、と。

——属国の提案に対して即答を避けたのは、そういうことだ。このまま貴殿をただの属国の王にして良いものかと。

さて、貴殿はどうか？」

ジルクニフは驚愕の顔を隠せなかった。今までの事が走馬燈のように、寄せては返す思考の波となって押し寄せてきた。魔導王は最初の会談から、こそこそと動き回るジルクニフの身を案じていたのか、と。

ジルクニフは考える。頭から煙が出そうな程に。何しろ今までの自分の考えが勘違いであり、全て裏目に出ていたのだから。

考え抜いて——やがて結論を出す。自分の浅はかな駆け引きなど無意味、考えるだけ無駄だったのだ。もはや引き返す道はないと、魔導王の顔をまっすぐに見て重々しく口を開く。

「……友を提案したのは、ただ我が国を対等に見せかけるための虚勢であり、断られることを前提とした交渉の手段の一つに過ぎなかつ

た。

全て魔導王陛下の仰る通り、私は掌の上で踊る道化師のようなもの。友など恐れ多い失言であった。……できることならば、この命をもって償いとさせて頂きたい」

ジルクニフの返答を聞き、暫く思案する魔導王。やがて強い口調で語り掛ける。

「ジルクニフ殿、貴殿は私を友と呼んだのだ。その責任は果たさなければならぬ。貴殿をアインズ・ウール・ゴウン魔導国の領域守護者に任命する。守護者としてバハルス帝国を発展させ、己の価値を証明せよ」

皇帝の地位等おまけ。兼任すると良い、と続ける。

ジルクニフは何を言われているのか理解できず、ポカーンとしていた。

「私は君を評価している。

まず、魔導国建国に尽力した功績——たとえこちらの思惑通りであつたとしても、だ。

次に、君は完全な形で帝国を譲ろうとした。愚かな者であれば属国など判断できなかつたであろう。そうすれば近い将来多くの戦火を招き国力を落とした状態で魔導国に下つていた可能性が高い。

何より気に入つたのは……初めて会つたとき、私や部下を前にしながらも君の堂々とした振る舞い。さすがは鮮血帝と呼ばれることにある」

そもそも領域守護者とは如何なる存在なのか？勝手な思い込みほど恐ろしいものは無いと、身をもって思い知らされたばかりだ。しかし、自分が今まで通り帝国を支配することになる、ということはおぼろ気に理解できた。

そして、確信したことがある。それは、アインズ・ウール・ゴウンには決して勝てない、ということだ。

ジルクニフはかつて無いほどの意思を込めて語る。もはや迷いは無かつた。

「魔導王陛下。今の私は陛下の友と呼ばれるのにふさわしくありません

ん。故に”陛下”と呼ばせて頂きたい。いつか、陛下の友となれるよう全力を尽くすことを誓いましょう」

この日、新たな領域守護者が誕生した。

魔導国の冒険者

新たな領域守護者が誕生してから数日。

バハルス帝国の帝都には既にデス・ナイト三百体、ソウル・イーター三百体が送られていた。これらのアンデッドはアインズの支配下のままであるが、領域守護者であるジルクニフに従うよう命じている。

逆に帝国からは大量の金品を始め、様々な物資が送り届けられている。ジルクニフには帝国で流通している金貨二十億枚相当の金品を送るよう申し付けている。

これは強制徴収したのではなく、デス・ナイトやソウル・イーターの代金でもない。ジルクニフ個人を守護する新たなシモベを召喚するための対価である。ジルクニフにはレベル八十前後のシモベ五体を送る予定だ。

レベル八十相当のシモベであれば一体の召喚につきユグドラシル金貨三〜四千万枚ほどが必要なので、多く見積もっても二億枚——帝国金貨の価値がユグドラシル金貨のおよそ半分としても、相当上乘せしているように思われるだろう。

この事を誰かに問い詰められたとしたら、アインズはこのように言うつもりだ。これは「手数料」である、と。

手数料分はエクステンジボックス——パンドラス・アクターを音改さんに変身させたうえ——で換金し、アインズのポケットマネーとして補充される算段だ。

アインズのポケットマネーはシャルティア復活、アルベドのシモベ十五体召喚などで枯渇寸前であったため、これで一安心と胸を撫で下ろしていた。

エ・ランテルの執務室、革張りの豪華な椅子に深くもたれかけ、アインズは次に何をすべきか天井の八肢の暗殺蟲たちを眺めながら考える。

「帝国方面はジルクニフに任せておけば問題ないだろう。次は……集まってきた冒険者たちか。アインザックに任せているが——まだま

だ冒険に出られそうなチームはいないらしいな。まあ問題があれば相談に来るだろう。次の件は——」

エ・ランテルの街には戦争前の活気が戻っていた。

アンデッドの支配する街というイメージが先行し各国の商人たちが避けていたのが原因だが、帝国が属国になったことでエ・ランテルから退避していた商人が戻り、交易が再開されたためだ。また、数多くの冒険者志願のものたちが押し寄せてきたことも拍車を掛けている。

とはいえ、超級のアンデッドが街中を闊歩するという恐怖をすぐには拭えないものがほとんどであるが——

そんなエ・ランテルにある冒険者組合、その組合長——プルトン・アインザックは苛立ちを隠せなかった。

「全く、どいつもこいつも！ 冒険者を舐めるな！」

冒険者を志願する者たちが応接室から出ていくと、アインザックは吐き捨てる。

というのも、連日冒険者を志願するものが後を絶たないのであるが、集まってくるのが銅級、鉄級冒険者ならまだ良い。元農夫やゴロツキなど、まともな喧嘩すら未経験のものが圧倒的に多い。

その上、冒険に出なくても金はでるのか、出たらいくらもらえるのか等くだらない質問に、何度叩きだそうと考えたことか。

そのような者達も魔導王陛下から適正を見るように命じられているため無下にはできず、魔術師組合の者やミスリル級冒険者チーム『虹』のモックナックたちを始めとしたエ・ランテル生え抜きの冒険者チーム、それからエ・ランテルの新たな住人——カルネ村より移住してきたゴブリンたち——に協力してもらい、なんとか最低限の身体能力の測定、魔法詠唱者の適性能力を見ている状況であった。

ふと、窓の外を眺めると休むことなく働き続けるデス・ナイトやソウル・イーターの姿が目に入った。

(……まだ始まったばかりだ。俺も彼らに負けないように頑張らないとな)

「ハアッ!」「フッ!」

威勢の良い声と木剣を打ち付ける音が響く。その数は数百に達していた。

ここは冒険者訓練所、中でも戦士職を希望する者が集まっている。

「そこまで! 今日終了だ!」

モックナツクは訓練生——冒険者見習いたちの中でも実戦経験がないもの——の前で訓練終了を宣言する。

「明日はここにいる全員ダンジョンに挑め! 一階層も突破できなかった奴は罰としてエ・ランテルを一周走ってもらおう! サボらないようにデス・ナイトが後ろから付いていくからな!」

それを聞いた訓練生たちはその状況を想像して悲鳴を上げる。

連日入ってくる冒険者見習いはとにかく数が多い。本来ならもう少し戦闘の基礎を叩き込んでから実戦に向かわせたいが、そんな余裕はなかった。

とはいえ、一階層はスケルトンやゾンビばかりだ。特殊攻撃もなく、剣を振る気概さえあれば問題なく踏破できるはずだ。

モックナツクは訓練所を出ると、近くにある外周部城壁の階段を上る。途中、警備のデス・ナイトとすれ違いながら城壁の上に到着すると少し離れた場所に佇むダンジョンの入り口を感慨深げに眺める。

(ダンジョン、か……早く『虹』の仲間たちと十階層を目指したいものだ)

モックナツクは腰に佩いた——五階層踏破の恩賞として頂いた——強い魔力を帯びたロングソードを見つめる。柄にはルーンと呼ばれる特殊な文字が彫られている。

ダンジョンは現在十階層まで作成されている。

五階層までには難度四十までのアンデッドが配置され、踏破したものを白金級冒険者相当と見做し冒険に出る資格と装備、魔導国冒険者としての給料が与えられている。

つまり、五階層を抜けられないものは冒険者見習いであり、冒険にも出られず魔導国からの給料ももらえない。手持ちの資産がなければ

ば魔導国からの支給品のみで生活することになる。

五階層を踏破したのは、現在のところモックナツク率いる冒険者チーム『虹』や数えるほどのチームのみだ。

十階層付近の情報は秘匿されているが、踏破したものはアダマンタイト級冒険者相当とされ、魔導王陛下により貴重な装備が下賜されるそうだ。

当然のことながら十階層に辿り着いたチームは未だ存在しない――

（十階層に辿り着けば、組合長が魔導王陛下より賜った強大な魔力を秘めた短剣と同等――いや、それ以上の武器や防具が頂けるかもしれない。そして、アダマンタイト級冒険者の称号――モモン殿の領域に踏み込むことも不可能ではない）

モックナツクは未来の自分の姿を思い浮かべ、鼓動が高鳴るのを感じていた。

「すまないな、モックナツク。本来ならダンジョンの深層に挑んだり、冒険の旅に出られるというのに……新人育成に付き合わせてしまつて」

アインザックは一日の冒険者面談と適性審査を終え、エ・ランテルの最高級宿屋である「黄金の輝き亭」にモックナツクと魔術師組合長ラケシルを伴い食事に来ていた。

「仕方ありませんよ。あれだけの冒険者志願のものたちが放置されるのは見過ごせませんからね。落ち着くまでは付き合いますよ」

モックナツクは手をひらひらさせながら軽い口調で答えるが、アインザックとラケシルは顔を見合わせ渋い顔をしている。

「帝国が魔導国の属国となったことは知っているだろうか？ 実は……帝国には魔導王陛下のアンデッドたちが送られることになっている。ただでさえ帝国は数多くの騎士を使って国を守っていたため冒険者の仕事は少なかった。その上アンデッドが送られたら――」

「……もつと増えるんですか？」

「そうだろうな。まあ、今来ている者よりはまともな冒険者たちだとは思うがな」

今までの志願者たちは、魔導王陛下の帝都演説を聞きつけて来たのだろう。これから魔導国に来る志願者は、帝国近辺で仕事がなくなつた冒険者だと考えられる。

モックナツクも同じように顔を顰め溜息をつく。

「高位の冒険者チームはどうするのでしょうか。帝国に居場所がないとなると——王国や都市国家連合ですか」

すると、それまで黙って聞いていたラケシルが声のトーンを落とすて話し出す。

「私なら王国には行かん。行くなら都市国家連合の方がまだ可能性がある……聡い者なら分かっているはずだ、あの帝国が、戦わずして魔導国の属国に下つた意味を」

三人の間に緊張が走る。

今は様子を窺っているだろうが、魔導国に隣接する国家が帝国に続くことは想像に難くない。ただでさえ魔導国と隣接する恐怖に耐えられないのに、今はヤルダバオトの脅威がある。

彼の強大な魔王に一夜にして滅ぼされた聖王国のことを考えれば、魔導国の庇護下に入ることが得策と考える国家も多いはずだ。

そのような情勢でも王国は動かない。魔導王にあれ程の力を見せつけられ、現在もヤルダバオトのいる聖王国と隣接しているにも拘わらず。

ヤルダバオトに襲撃された時もモモンがいなければ王都は壊滅していた可能性が高い。そのモモンは既に魔導国に下っている……。

近い将来、王国は滅びる。ヤルダバオトに滅ぼされるか、魔導国の逆鱗に触れるか、それとも自滅の道を辿るか——それらを理解してなお王国へ向かう冒険者などいない。

重い空気を変えるように、運ばれた泡酒を一気に飲み干してアインザックが言う。

「みな冒険者なんだ、生き場所くらいは自分たちで選ぶ。それに魔導王陛下であれば無抵抗のものには危害は加えないさ。」

それよりもラケシル、王国に逃がした魔術師組合のメンバーたちを呼び戻せないか？ 魔法詠唱者が不足しているんだらう？」

「連絡はしているのだが、王国の組合が止めているようだな……まあ、何とかしよう。」

それにしても人手が足りんぞ？これからもっと増えるというのに……これではいつまでたっても冒険に出られんではないか」

アインザックが頷いているのを見てモックナックが驚いたように聞き返す。

「ちよつと待つてください、お二人とも冒険に出られるのですか？

仮にそうだとしても、先に私のチームを行かせてほしいのですが……」

アインザックとラケシルが二人揃ってニヤリと嗤う。

「ハハハ、それは勿論だとも。ただし、今日来たばかりのヒヨっこが一人前になる頃には我らも出ていくつもりだがな！」

然り、と三人は笑い声を上げた。

魔導王陛下に敬服し強大な力の恩恵を受け、夢を見ることを許された特権に心から感謝して。

翌日、アインザックは魔導王アインズ・ウール・ゴウンの住居に向かっていた。

目的はカルネ村からより多くのゴブリンたちに移住してもらい、訓練所に従事してもらうよう請うためである。

魔導王の住居が近づいてくるにつれ、敷地内にあるモモンの屋敷が見えてくる。最近忙しくて彼に会っていないことを思い出す。彼に新米冒険者たちの訓練を手伝ってもらうことを考えたが、そんなことに彼を使うなんてとんでもない、と思い直した。

門の警護をしているデス・ナイトに来訪の目的を告げると、デス・ナイトは奥に走っていき、ほどなくして地下聖堂クリプトローダの王がやってくる。

デス・ナイトにはすっかり慣れたアインザックではあったが、デス・ナイトを遥かに超える力を感じる彼の存在には緊張を隠せなかった。

中庭へ通され魔導王の住居に向かって歩き出すと、すぐに金属が激

しくぶつかり合う音が聞こえてくる。

音のする方向にはモモンの騎獣である『森の賢王』ハムスケとデス・ナイト、帝国の闘技場から魔導王陛下直々に連れてこられた『武王』ゴ・ギン。

どうやらデス・ナイトと武王が戦闘訓練をしているようだ。武王の振り回す巨大な槌をデス・ナイトは盾で防いでいるが、体勢を維持しながらも時折数メートル後退している。

(さすがは武王だな。デス・ナイト相手にあれほど優勢に戦えるとは) 名残惜しいが本来の目的を思い出し、扉をノックすると中にいた^{エイトエッジ・アサン}八肢の暗殺蟲に扉を開けてもらい執務室を指す。執務室に辿り着き中にいるメイドに用件を告げると室内へ通された。

豪華な椅子に座る魔導王陛下の姿を目の当たりにすると、ほっと緊張が解けて一息つく。

「どうしたアインザック、何か問題でもあったか？ ルーン武具なら一部の冒険者に褒美として渡す分くらいしか生産できていないぞ」

魔導王陛下に声を掛けられると、アインザックは素直に相談事を持ち掛ける。

「なるほど……それでは早速手配しよう。これから冒険者が増えるとなると多い方がいいな」

魔導王陛下は^{メッセージ}＜伝言＞を使い何者かに指示を出しているようだ。相変わらずの対応の速さに改めて感服する。

「手配したぞ、近日中には多くのゴブリンが訪れるはずだ」

「ありがとうございます、魔導王陛下」

深々とお辞儀し感謝の言葉を述べると、魔導王陛下が思い出したように尋ねてくる。

「そういえば、ダンジョンの階層を更に掘り進めようと思うのだが……十層を抜けそうな冒険者はいるか？」

アインザックは苦笑しながら答える。

「陛下、十階層を超えられるのは恐らくモモン殿だけかと……蒼の薔薇であれば、もしかしたら可能かもしれませんが——」

「そうか……確かに焦っても仕方ないかもしれん。だが、いつかモモ

ンの領域に辿り着く者——大英雄の誕生を待ちたいのだ。そのため
の準備と心得よ」

（大英雄、か。私には届かない遥かな高みだと分かっている。彼らは
どうだろうか）

アインザックは冒険者組合に戻ると、今日の冒険者志願の面接を始
める。

あどけなさの残る緊張した面持ちの志願者が椅子に座るのを確認
すると、アインザックはいつもと違う質問をする。

「君たちはモモンのような大英雄になりたいと、考えたことはあるか
ね？」

帝国の騎士

ナザリツクでの謁見の後、皇都へ戻ったジルクニフは帝国の内外に對して事実を公表した。すなわち、魔導国より正式にバハルス帝国の皇帝に任命されたこと、魔導国が保有する強大なアンデッドの指揮権を与えられたことだ。

アンデッドはジルクニフの命令が無ければ人間に危害を加えることはない。そのことを国民に理解させなければならなかった。そのため、皇帝自らアンデッドと騎士団を使った合同の軍事パレードを行い、アンデッドが完全に指揮下にあることを知らしめた。

当初、帝国民は属国化による皇帝に対する不信感や街中をアンデッドが闊歩する恐怖に支配されていたが、ジルクニフの指揮で動くアンデッドを見ると熱烈な支持をもって受け入れた——これには理由がある。

隣接する魔導国、そしてヤルダバオトの脅威が国民に強い不安を与えていたためだ。流動する世界情勢を見極めて迅速に対応した皇帝を称賛するのは自然の流れだろう。

反抗していた四大神殿や一部の貴族も同様だ。魔導王からこれ程の権利を勝ち取り、帝国民の圧倒的な支持に對して、皇帝を貶めよう等と考える者はいなかった——

ジルクニフが領域守護者の地位に就いてから一か月。帝都はようやく本来の落ち着きを取り戻していた。

帝都アーウィンターの皇城にある皇帝執務室では連日白熱した議論が交わされ、次々に新たな政策が決められていった。

その渦中にありながら、ジルクニフは穏やかな眼差しで目の前の喧噪を眺めていた。

(平和だな……)

慌ただしくも平穏な日々を過ごしていると、あれは夢であったのかと錯覚することもある。

だが、ふとしたことで思い出す——完膚なきまでに砕かれた過去の自分を。

あの絶望こそが自分を成長させたと確信している。だからこそ、あの絶望を生涯忘れないだろう。

ふと、何気無い仕草で髪を梳き、ゆつくりと視線を手に移す。何も付いていない手を見つめながらジルクニフはほくそ笑んだ。

「……陛下！ 陛下！ 聞いてました!？」

物思いに耽っていたジルクニフは自分と呼ぶ声に意識を戻す。声を掛けたのは帝国四騎士の一人、『雷光』の異名をもつバジウツドのようだ。その隣にはバジウツドと激しく討論していた秘書官——ロウネ・ヴァミリネンをはじめ、十名ほどの側近たちも困り顔でこちらを見ている。だが、居並ぶ者たちの目に宿る光からは強い意思を感じた。

「……そんな大声で呼ぶな。私が口を挟んではお前たちの議論に水を差してしまうと考えて黙っていただけだ」

薄く笑みを浮かべ、全く聞いていなかったことを誤魔化した。

「何を仰いますか。陛下の意見に追従するだけの無能など、この場におりません」

ロウネの言葉に周りの者たちも賛同するように頷く。そんなやりとりをする僅かな時間を使って今日の議題を思い出していた。

「では私の考えを述べるとしよう。今日の議題は都市国家連合の件だったな——」

現在、バハルス帝国に隣接している国家は——カツツエ平野を挟めば法国や竜王国も入るが——都市国家連合だけだ。当然、魔導国本国は除いている。

ジルクニフは先の戦争により減った騎士の穴埋めとして都市国家連合との国境にデス・ナイトとソウルイーターを多数配置するよう手配した。これは、帝国がアンデッドの力を自由に使えること——いつでも侵攻できることを都市国家連合に知らしめる意図がある。

「——都市国家連合は将来的には併合するつもりだ。だが今は脅すだけで良いだろう。力は効果的に使ってこそ価値がある……無用な血

を流しては得られる利益を減らすだけだ」

「アンデッドを数体送り込むだけで連合は終わるでしょうね……力の差があり過ぎるといいうのも困りものですね……」

強者側の発言だ。ジルクニフは鼻で嗤う。

「あくまでも『無用な血』だ。必要あれば力を使うことに躊躇いはない」

だが、弱肉強食の理も分からない愚かな者には力の差を思い知らせることも必要だ。居並ぶ者たちはカッツエ平野の大虐殺を思い出したのか表情を曇らせている。

「並行していくつかの都市を寝返らせるよう裏から手を回す。ひとつ落ちれば後は簡単だ。大義名分を作りだし飲み込めば良い……人間など容易いものだ」

ジルクニフはどこか遠くを見ながら最後は呟くように言った。

脳裏によぎるものはアインズ・ウール・ゴウン——魔導王陛下。強大な力をもちながら智謀によりことを進める存在のように、少しでも近づけるように。

「では、ヤルダバオトのことですが……問題ないとのことでしたが、もし襲ってきたならば——」

「お前には伝えていなかったか……まあ良い。その時はあの者たちを使う。あの者たちであればヤルダバオトを撃退することは十分可能だと、魔導王陛下のお墨付きだ」

この皇城の守護を任せている五体のシモベ——一体で千ものデス・ナイトすら滅ぼせる者たち……さすがに過剰戦力だ……使いどころがまるで思い浮かばない。部下たちには対ヤルダバオトの切り札と伝えたのだが——

（……ヤルダバオトの件、魔導王陛下は”考える必要はない”と、仰られた。ならば、そういうことなのだろう）

——生まれ変わったジルクニフは、その程度では驚かなくなった

帝国四騎士の一人、『重爆』レイナースは悶々とした思いで皇城の中庭を歩いていた。中央には百を超えるアンデッドたちが不動の姿勢で主人の命令を待っている。

「はあ……」

今日、何度目かの溜息をつく。

溜息の理由は単純だ。周囲の騎士たちでも知っている。魔導国——正確にはアインズ・ウール・ゴウン魔導王——との繋がりが持てない。

自分には何も無い。陛下——ジルクニフ——に力を見込まれ、仕えてからは帝国四騎士と称されてきた。自分の実力を冒険者で表すならば『オリハルコン級』に匹敵するだろう。

だが、魔導国にとってはその程度、何の価値も無い。目の前にいるデス・ナイト一体にすら全く歯が立たない。そんなデス・ナイトでさえ魔導国ではただの一般兵扱いだ。その上、デス・ナイトは魔導王の力により無限に作成できる。休みなく働くことができる。警備もできる。喧嘩の仲裁も、荷物の運搬、農作業……。

帝都にアンデッドが配置されて以来、日記に書かれる内容はデス・ナイトのことばかりだ。

初めてナザリック地下大墳墓を訪れたときはメイドの美しさに嫉妬した。今は有能なデス・ナイトに嫉妬している。

泥々とした闇が心を蝕んでいく——不快だ。許容できない感情が外に漏れる。

「ちっ」

この身に掛けられた呪いが解かれる日まで、この闇は決して晴れることは無いだろう。

日が沈み城内に魔法の光が灯る頃、レイナースは階段を上って見晴

らしの良いテラスへ向かっていた。夜の街並みを眺めれば少しは気が晴れるかもしれない、と考えたからだ。

テラスへ出るとそこには先客がいるのが見えた。さらに近づくと先客が誰なのかが分かって戻ろうとしたが、相手に気づかれた為そのまま歩みを進める。

気まずさを表情には出さず、無表情を装いながら一礼する。

「今日の討論は終わったのですか？」

「ああ、決めるべきことは大体終わったな。明日からはゆつくり出来そうだな」

「それは……おめでとうございます」

心が全くこもらない形式的な祝辞を述べる。対人関係において百戦錬磨のジルクニフには何の意味も無いことはわかっている。

「めでたい、か。お前は全くめでたそうには見えないな」

やはり逆効果だったか。もうこの場を離れたい気分になられたとき、ジルクニフが唐突に切り出した。

「——魔導国に行きたいか？」

あまりに唐突な質問に驚いて一瞬目を見開くが、すぐに自信なさげに目を伏せた。

「……行ったところで、私ごときが何の役に立ちましょう——」

「魔導王陛下ならばお前の望みを叶えることは容易いだろうが……対価に差し出せるものが無い、というのだな？」

自分が気にしている核心を突かれ、レイナースは唇を噛み沈黙するしかなかった。

ジルクニフは返答を待っているようだが、レイナースには返せる答えなど持ち合わせていない。

ジルクニフは眼下に拡がる帝都の夜景に目を向け、暫く眺めていたが溜息をつく。

「……エ・ランテルに作られたダンジョンのことを知っているか？」

冒険者育成のために作られたとのことだが、未だ踏破したものはいないそうだな」

その噂は聞いたことがある。魔導王が作ったダンジョンにアン

デッドを放ち、冒険者に攻略させているというのだが……突然そんな話をしたジルクニフの意図を量りかねる。

「——そのダンジョンを踏破したものにはアダマントイト級冒険者の称号と魔導王陛下の所有される武具が与えられるそうさ。そして、どんな望みも——というわけにはいかないだろうが、呪いを解く程度なら叶えてくださるかもしれないな」

レイナースの心は激しく揺れていた。その話に飛びつきたい……だが、心に引つかかる。遠まわしに自分を放逐すると言っているのではないか？ 冒険者として生きると、そう捉えるのが自然だ。

レイナースはバジウツドやニンブルと違い、忠義でジルクニフに仕えているわけではない。仕えている理由はたったひとつ——恩義だ。呪いを受けた自分を捨てた家族と婚約者に、復讐する機会を与えてくれたジルクニフに、恩を返すために。

レイナースは俯きながら言い繕う。

「わ、私は陛下に受けた恩を返すまでは——」

「ならば、さっさと呪いを解いて戻ってくるが良い。魔導王陛下には話を通しておく」

信じられなかった。忠義もなく、力でも役に立てない自分に対してここまで配慮する価値があるものか。

しかし——

「ああ、そうさ。ついでに暇な奴らも連れていってくれ。ニンブルとバジウツドもな。」

いまや帝国四騎士とは名ばかりで戦力として数えるのは心もとない。今後のため、奴らにも変わってもらわないとな」

……私にばかり苦悩を……少しは味わえ……と、ぶつぶつ呟きながらジルクニフは悪戯が成功した子供のようには笑っていた。

レイナースはこの様子を見て、ようやく他意は無いと理解できた——悪意はあるようだが。

だが安心はできない。ジルクニフにとっても今の自分には価値がないことは事実。ただ、自分のやるべき事は決まった。

「この呪いから解放された暁には、その時こそ陛下に忠誠を尽くすこ

とを誓いますわ」

レイナースの眼には強い光が宿り、表情は憑き物が落ちたように清々しかった。

幕間―諸国の人々

・竜王国

竜王国の王城にある簡素な作りの王の間。そこにいるのは二人の男女――初老の男と少女だけだ。

玉座の傍らに立つ初老の男はこの国の宰相であり、玉座に座る若い少女は竜王国の女王――黒鱗の竜王――ドラウディロン・オリウクルスである。

いま、彼女は頭を抱えていた。

――遡ること二ヶ月前。

援軍を要請していたスレイン法国から待望の援軍が送られてきた。

しかも、退役し一線を退いたとはいえ法国の最強特殊部隊『漆黑聖典』に属した者たちである。

漆黑聖典の存在は法国の国家機密事項であるためその名を公表することはできなかったが、法国援軍の報は前線にいる兵や冒険者の士気を大いに上げた。

事実、皆が期待した通り――それ以上に彼らは強かった。

かつて救援にきた陽光聖典より強大な天使を使役する神官戦士。

目で追いきれない程の速さで動き、急所を突く盗賊系の戦士。

人間より力で勝るビーストマンを得物ごと叩き潰す全身鎧の戦士フルプレート

――その他の隊員も人間とは思えないほどの力を持っていた。正しく“英雄の領域”に立つ者たちであった。

たった十二名の援軍は一か月あまりで数千もの屍の山を築いた。戦線を押し戻し、ついに奪われた都市のひとつを取り戻した。

――勝てるかも知れない。人々が希望を持ち始めた頃、戦況が一変した。

十五万人が住む王都に次ぐ都市をビーストマンの大群が押し寄せたのだ。

今までは様子見だったと言わんばかりに、その数は都市の人口を遥

かに超えていた。

元漆黒聖典はその都市にいた。彼らだけなら撤退は可能だっただろう——だが、そうはしなかった。

彼らは高齢の者たちばかりである。祖国には孫や曾孫までいる者も多い。

どうせ先の短い命。ならば、この都市で暮らす人々を救うため——人類の未来のため——命を使おうと覚悟を決めたのだ。

ビーストマンと正面からぶつかっても勝ち目は無い。彼らは都市の住人と話し合い、脱出計画を立て即座に実行した。

結果——囚役に志願した住人は全滅したが、女、子供を中心に多くの住人を逃がすことに成功した。彼らは逃げる者たちの殿を引き受け、津波のごとく押し寄せるビーストマンの軍勢を押し留めた。持てる力の全てを使い、一人でも多くの住民を逃がすため戦い続けた。

やがて、彼らは住人が逃げ切るまでの十分な時間を稼いだ後、魔力も精神力も枯れ果ててビーストマンの軍勢に吞まれていった。

人々の希望は消え去った。だがビーストマンも数万もの被害を受けたためすぐには動けなかった。

竜王国には久々に平穏という名の静寂が訪れていたが、それが仮初のものであることを誰もが理解していた。

「——聞くところによると、魔導王は魔法一発で十万以上の兵を殺したというではないか。うじやうじや湧いてくるビーストマンどもをドーンと一発殲滅してもらえんかな?」

「……」

「魔導国は一体で小国を滅ぼせるほどの兵を数百保有しているらしいぞ?　なんと、それらに荷馬車を引かせたり、畑仕事に使っているというではないか!　ちよっとくらい借りても良いのではないか?」

「陛下……」

「なんだ？　聞く気はないが言ってみろ」

「では、お言葉に甘えて。その方針が決定であればすぐに使いを出しましょう」

ドラウデイロンはくたびれた表情を隠さずに溜息をついた。

「……分かつている。魔導王はアンデッド。兵もアンデッド。つまり法国にとつては相いれない敵、だろ？」

この異国の地で散っていった彼ら、そして彼らを送ってくれた法国の恩には報いたい……報いたいが、どうしろと言うのだ？　最後の一人になるまで戦って、やつらの食糧になれというのか？」

これ以上援軍を期待できないため兵たちの士気は低く、王都には絶望の気配が漂っている。

アダマンタイト級冒険者チームの『クリスタルティア』は健在だが、ビーストマンの数に比べれば焼け石に水だろう。

ワーカーチームの『豪炎紅蓮』は姿が見えない。既に国外へ脱出したのかもしれない。

「それより早くこちらの食糧が底を突くかもしれない。現在王都にいる全ての者が生きていくなら、もって二ヶ月……と、いったところでしょう」

まるで他人事のように、冷ややかに言い放つ宰相が恨めしかった。

長年の付き合いで宰相のことはよく分かっている。感情的になりやすい彼女の補佐役として、彼はわざとこのような役回りを受け持っているのだ。

……時折見せる彼女をからかうような皮肉は本心であることが多いのだが……。

「はあ……この国を救うには恩義を投げ捨てて悪魔に魂を売り渡すしかないのか？」

「魔導王は『悪魔』ではありません、『アンデッド』ですよ」

「知っておる！　言葉尻を捉えるな！」

そう言い放つと、茶化するような宰相の表情を窺う。彼の表情は先ほどまでの薄い笑みではなく苦渋に満ちたものに見えた。

「……私も魔導国にすぎる以外に方法は無いと考えます。相手がアンデッドであろうが悪魔であろうが、我々にはこの国を存続させる義務があります」

ドラウデイロンは小さな手で頭を抱えた。

残された手段はもうひとつあるのだ——百万もの魂を対価にして放つ始源の魔法——だが、それを選択することは国を滅ぼすことに等しい。

それでも、全ての国民が奴等の餌になるよりは遥かにマシな気がした。

ドラウデイロンは竜王国の存亡を決める、最後の決断に迫られていた。

・スレイン法国

スレイン法国神都、その最奥。

今後の対応を決めるべく彼ら最高執行機関——最高神官長、六大神の各神官長、司法・立法・行政の各機関長、研究機関長、大元帥の十二名——は集まり会議が行われていた。

最初の議題に挙げたものは魔導国の件——ではなかった。

魔導国よりも緊急性が高いと判断されたのは、ヤルダバオトの件であった。

それには理由がある。

聖王国と法国の間にある、多数の亜人たちが日々紛争を繰り返している荒野で悪魔を見たという報告があったためだ。ヤルダバオトの次の狙いは法国ではないか、と考えても不思議ではない。

「風花聖典を調査に行かせてはどうか？」

「いや、下手に刺激するのはまずいな」

「竜王国に送った元漆黒聖典の者たちを呼び戻して襲撃に備えるべきでは？　今は少しでも戦力が欲しい」

元漆黒聖典の話が出ると、幾人かが神妙な顔をしたことで場に沈黙が訪れた。やがて土の神官長——レイモン・ザーグ・ローランサン——が重々しく口を開く。

「彼らは戻ってきません……死体は回収できませんでした」

たとえ死んだとしても死体さえあれば復活は可能だ。だが——相手は人間を食糧としか見ていないビーストマンだ。彼らが復活できる可能性はゼロに等しいだろう。

皆の目に一瞬、憎悪の色が宿る。

「おのれ獣どもめ！　このままでは奴等を増長させるばかりだ！

奴等に人間の力を示すべきではないか!？」

「落ち着け。今はヤルダバオトの件だ。それに、殉職した者たちの中にはレイモンの同期も何名かいたのだ。仇を討ちたい気持ちは彼の方が強いだろう」

その言葉により、騒然としていた場には静寂が取り戻された。レイモンは元漆黒聖典の隊員であり、援軍——同僚や先人たち——を竜王国へ送り出した責任者でもあった。

今は重要なことから決めなければならない。六大神の像を眺めて心を落ち着かせると議論を再開した。

「——ヤルダバオトの件だが、荒野で見たという悪魔は囷という線はないか？」

「それは十分に考えられる。悪魔というものは狡猾だ。罨を張って我らが来るのを待ち構えているかもしれない」

「ならば荒野は放置するのか。だが近い内に来るぞ」

「その時はこの神都で迎え撃つしかあるまいて。ヤルダバオトを『ケイセケコウク』で魅了するのだ」

「なるほど……うまくすればビーストマン、エルフ、そして対魔導王の先兵とすることも出来るか」

しかし、幾人かは首を捻って考え込んでいた。

「相手は神の領域に立つかもしれない存在。もしケイセケコウクが効かなかった場合は——」

「全力で撃退するしかないでしょう？　この神都であれば、あの子を使っても問題ないはずよ」

その言葉にようやく全員に納得の表情が浮かんだ。

神々の装備を身に着ける番外席次。彼女が負けることは考えられなかった。

「……ヤルダバオトについては皆様、異論無さそうですね。予定では次の議題は魔導国でしたが、その前に先ほどの件——竜王国について明確にしておくべきではないかと」

レイモンは皆が無言で頷くのを確認すると話を続けた。

「現状、竜王国にこれ以上支援することは出来ないと考えます」

冷酷な意見だが、これに対して反対意見は挙がらなかった。

「先ほどは感情的になってしまったが、落ち着いて考えると……彼の国に対して支援できることは無いかもしれん」

「見殺しにする、と言えば聞こえは悪いが……その通りなのだから仕方あるまい。ヤルダバオトの問題が解決しない限り我々は動けん」

「聖王国に続いて竜王国まで……人類の生存圏がどんどん狭まっつていくな」

「——属国のくせに領土拡大の動きを見せる国があるではないか」

その発言は一同の表情を様々なものに変えた。

怒り、苦笑、困惑、そして——理解。

「愚かな皇帝め！　アンデッドの犬になり下りおつて！」

その意見にその場にいる半数ほどが頷く。だが、残りの半数はそうではなかった。

「あら？　帝国にいるアンデッドは皇帝の指揮で動いているそうよ？」

「……バハルス帝国の皇帝は死霊使いにでも転職したのか？ それとも人間を辞めたのか？」

「魔導王はエ・ランテルの近郊にダンジョンが作り、人間をそこに放り込んでいると聞いたぞ。そこでアンデッドに変えられているのでは」「——魔導国は人間を蔑ろにはしておらん。むしろ我等の神の行いに近いのではないか？」

それを理解した上で属国になることを決めたのであれば、優れた皇帝と言えるのでは？」

「そうですね。魔導王と一度話し合いをしてみてもどうでしょうか」

「待て！ 先の大虐殺を忘れたか！ あの所業こそ魔導王の本性だ！

心を許し我等の手の内を明かしたら、取り返しのつかないことになるぞー！」

「そうだ！ お前は自分の子や孫たちに、エルダーリッチやデス・ナイトどもと仲良くしろと言えるのか？」

その後も様々な意見が飛び交い、一向にまとまる気配は無かった。

司会であるレイモンはこの場では最年少であるが、慣れたもので、紛糾した会議を終わらせるためにあるを提案する。

「皆様のお気持ちはよくわかりました。まとまらないようですので

……魔導国は引き続き様子見で宜しいでしょうか？」

今まで通り。可もなく不可もないが……

「異議なし」

魔導国への対応について何かが決まったことはなかった。

竜王国の女王

「守護者たちよ、良く集まってくれた」

ここ、エ・ランテルの執務室には階層守護者——ヴィクティム、ガ
ルガンチュアを除く——がアインズの命により集まっていた。

守護者たちは跪き、主人の言葉を聞き逃さないように全神経を集中
する。

「皆を集めたのは他でもない、既に知っていると思うが竜王国から我
ら魔導国に対して救援を要請する使者が来た」

——竜王国から援軍を乞う使者が来たのは昨日のことだ。

竜王国は現在ビーストマンの軍勢に押し寄せられ、既に殆どの都市
が陥落し王都も危ういとの事だ。つまり滅亡寸前だ。

この報せを聞いてからアインズは上機嫌だった。

（今まで国交が無かった竜王国が助けを求めてくるなんて、冒険者が
魔導国の良い噂を広めてくれている成果かもしれない！）

これは是非救わねば、などと固く決心しつつ意気揚々と階層守護者
を招集したのだ。

「——私の考えを述べよう。この要請を受け、竜王国を助けようと思
う。親交は無いとはいえ、我が国に助けを求めてきたのだ。正義を掲
げるアインズ・ウール・ゴウン魔導国としては助けない理由はあるま
い」

守護者たちを見渡せば、その表情は一樣に理解を示していると感じ
た。

「それでは、誰を向かわせましょう？ 数が多いだけの軍勢であれば
マーレが適任ではないでしょうか」

「マーレは新しいダンジョン製作で忙しいのでありませんか？ ……
私ならいつでもお役に立てるでありんす」

「はあ!? ちょっと殺しただけで〈血の狂乱〉が発動するようなあんた
が、どの口開いてアピールしてんの？ ……アインズ様！ あたしな

らペットを使って遺体回収もすぐですよ！」

珍しくアウラもアピールしている。同僚からも評価が低いシャルティアの〈血の狂乱〉であるが、ただ軍勢を始末するだけなら発動しても構わないだろう。だが――

「私が行くつもりだ」

守護者の間に動揺が走る。主人からの説明が無くては到底納得しかねる。

「お待ち下さい。御身自らのお手を煩わせるなど、臣下として恥ずべき行為に他なりません」

「マサシク、デミウルゴスノ言ウ通りデス。命ジテ頂ケレバ即座ニ殲滅シテ参リマス」

懇願する守護者の言葉を聞いていたが――アインズには一晩中考えていたあるアイディアがあった。

「勘違いするな。私は戦場に立つつもりは無い。敵を倒すのはアンデッドの軍に任せようと考えている」

（これはアンデッドの有用性をアピールするチャンスだ。ピンチに颯爽と駆けつけて敵を蹴散らすアンデッド――。敵を蹴散らした後、アンデッドはそのまま貸し付ければ良い。竜王国からは感謝され、周辺諸国は魔導国を正義の国と認めるだろうし、逆に向こうからアンデッドを貸して欲しいと言ってくるに違いない。……アンデッド産業の時代が来るな……）

自分の計画に満足しながらも、ちらつとデミウルゴスを窺う。アインズは自分が考えた計画が完璧だとは思っていない。

しかし――今回は自信がある。さすがのデミウルゴスも自分以上のメリットは考え付かない、はずだ。

「それは……つまり……なるほど、そういうことですか」
「そうね。さすがはアインズ様だわ。こうなることを見越して冒険者を育成していたなんて……」

考えこんでいたデミウルゴスとアルベドは、すぐに納得したように主人に称賛の笑みを向ける。

「——きたか……って、あれ？ 何で冒険者が出てくるんだ？」
話についていけない者は困惑して、理解している者の表情を窺って
キョロキョロしている。

場の雰囲気には耐えきれなかったのか、アウラが切り出した。

「アインズ様、どういふことですか？」

答えたいがアインズも冒険者のことは全く考えていない。うかつ
に説明して底の浅さを露呈する訳にはいかなかった。困った……悩
んだ挙句、アインズは最後のカードを切る決断をする。

「……デミウルゴスよ、皆に分かるように説明せよ。分かりやすく、だ
ぞ？」

「畏まりました」

満面の笑みを浮かべて恭しくお辞儀すると、デミウルゴスが語りだ
した。

「まずアンデッドを使うことだが、これには四つのメリットがある」

(四つ、だと!?)

「敵を蹴散らし周辺諸国に正義と国の力を見せつけること、その後竜
王国にアンデッドを貸し付けること。ここまでは言うまでもないだ
ろう。」

次に竜王国がアンデッドを借りることで周辺国家も借りなければ
ならない。アンデッドを戦争に使われたら対抗できないからだ。

ここで問題がある。それは、ひ弱な人間たちはアンデッドを恐れて
いること。まあ、当然だね。だからこそ、ここで魔導国の冒険者が活
きてくる。

魔導国の冒険者はアンデッドと共に生活し、共に成長してきた。ア
ンデッドに対して親しみを持つ者も多い。その冒険者が派遣された
アンデッドと親しくすることで、その国の民に安心感を与える。まず
周辺国家は竜王国の噂を聞いて我先にアンデッドを借りようとする
だろうね。そうしてアンデッドを防衛に、労働力に使わせ国家の基盤
に浸透させてアンデッド無しでは成り立たないようにする——他に
も我々階層守護者の存在を秘匿するなどがある。勿論、アインズ様
にはより深いお考えがあるのでしようが……」

「——そ、その通りだ。さすがはデミウルゴス。私の考えをよく読んでいる」

——どもった。アイنزは何度も精神が抑制されつつ、一晩考えた自信満々のアイディアだったのだから仕方ない、と自分自身を慰めた。

「アイنز様、せっかくなので『強欲』を使われてはいかがでしょうか？」
「それは良い考えだな、アルベド。王国との戦争では奴らから経験ポイントを集める機会がなかったからな。マーレ、『強欲と無欲』を借りるぞ」

「あ、はい！ どうぞー！」

マーレが両手に着けていた『強欲と無欲』を外してアイنزに差し出してくる。アイنزがそれを両手に着けるが……マーレは耳をたらして嬉しそうにそれを見つめてくる。

(なぜ嬉しそうなんだ……)

マーレから視線をそらしつつバツが悪そうにアイنزは宣言する。

「守護者たちよ、それぞれの役割を果たすのだ。準備が整い次第竜王国へ乗り込むとしよう——」

——竜王国の王都。

王都は分厚い城壁に囲まれ、相当な軍勢をもってしても簡単には陥落できないだろう。

その日、王都を目指して奇怪な咆哮を上げながらビーストマンが進

軍していた——その数二十五万。その軍勢を見た者は王都の城壁では数日ももたないことを悟るだろう。

ビーストマンの軍勢から竜王国の王都が見えてくるとビーストマンは嘲笑うかのように一層大きな咆哮をあげる。咆哮は大きな波となり王都に叩き付けられ、住人を震え上がらせた。

城壁の外側には人の姿は無い。野外戦では太刀打ちできないことを理解していたため王城に立て籠もっているのだ。竜王国兵の士気は低く、ほとんどの者が項垂れて地面に座り込んでいる。

そんな中、アダマンタイト級冒険者チーム『クリスタルティア』の”閃烈”セラブレイトは城壁の上でビーストマンの軍勢を眺めていた。

「遂に来たか……。お前たちは付き合う必要ないぞ？　これは俺の我がままだからな」

「私たちは女王のことはどうでもいい。だけど仲間は見捨てたりしない」

彼の仲間たちは最後まで『クリスタルティア』として行動するようだ。セラブレイトは嬉しさを表情に出しながらも仲間たちに心の中で謝罪した。

「そうか。ならばやる事はひとつ、奴らが人間を見て食欲が湧かなくなるまで殺し尽くしてやるか」

そう言い放つと、地を埋め尽くして王都を押し包むように扇状に拡がりながら迫るビーストマンの軍勢を眺める。先頭のビーストマンには城壁から魔法が届きそうな距離だ。

目前に迫る絶望を見ても彼の戦意は衰えていない。アダマンタイト級冒険者として、最後まで幼い女王のために戦う覚悟がある。

周囲の兵たちも矢や魔法を放とうとした。

そのとき——城壁の上に死を具現化したような存在が顕われた。

「はじめまして、竜王国の者たちよ。私はアインズ・ウール・ゴウン
魔導国の魔導王だ。竜王国の女王の救援要請を受けてこの国を助け
に来た」

アインズは遠隔視の鏡で竜王国王都の位置を確認し、
グレート・テレポーター・シミュレーションで移動してきたのだが……

（周囲の者たちを少々驚かせてしまったか。一応挨拶をして敵ではな
いことを説明したから襲ってはこないと思うが……）

周りを見れば皆こちらを見ながら固まっているようだ。面倒なの
で放置してシャルティアに〈伝言メッセージ〉を送る。

「聞こえるか、シャルティア。〈転移門ゲート〉を開き私のいる城壁の外側に
兵を送れ」

ビーストマンたちは王都に立て籠もって震える竜王国国民の姿を想
い、嘲笑いながら城壁に近づいていく。もう城壁まで数百メートルの
距離に差し掛かって——突然動きを止めた。

城壁の前に黒い半球のようなものが浮かび上がったからだ。

そこから現れたのは——彼らにとつての絶望だった。

大きな盾を持った棘付き鎧の戦士が五百、そして戦士が乗る骨の魔
獣は黄色と緑の膿のような霧を纏っていた。

間違いなくアンデッドだ。ビーストマンの旺盛な食欲は全く反応
しない。その替わりに生物としての生存本能を激しく刺激していた。

見たこともない化け物を前にビーストマンの軍勢は静まりかえつ
て——はいなかった。カチカチ、カチカチと彼らの牙が擦れ合う音が
戦場に響いていた。

「——蹂躪を開始せよ」

どこからか厳かな声が聞こえる。牙が生み出す音が響く中、その声
はやけに大きく聞こえた。

骨の獣——ソウルイーター——とそれに跨る戦士——デス・ナイト——がビーストマンの軍勢に突撃を開始する。

それらの化け物はビーストマンの数に比べれば圧倒的に少ない。数の優位が彼らを奮い立たせ突撃してくる化け物を返り討ちにしようとして武器を構えた。

数歩の距離に入ったとき、突然骨の獣が纏う靄が周囲に拡がり数体のビーストマンを飲み込んだ。光に飲み込まれたビーストマンはもがくこともなく糸が切れた人形のように崩れ落ちる。

靄が透けるような青い光を伴ってビーストマンの身体から離れていき、青い光を取り込んだソウルイーターは靄の輝きが一段と大きくなった。

ソウルイーターの持つスキル《魂の吸収》は、靄に取り込んだ生物の魂を糧として一定時間自己を飛躍的に強化し——強化時にはレベル五十にも匹敵する。そして、スキルに使用回数制限はなく連続で使用可能、というものだ。

化け物の軍勢は縦横無尽に走り回りビーストマンを虐殺していった。

魔導国では馬車を引き、畑を耕していた化け物は、日ごろの鬱憤を晴らすかのように生物の命を奪う喜びに暴れまわった。

蹂躪が開始されてから僅かな時間に戦場は阿鼻叫喚の地獄と化していた。

当初は戦う気力を維持していたビーストマンも獣としての本能により、武器を捨てて全力で戦場を離れようと無我夢中で逃走した。

しかし、ソウルイーターの移動速度はビーストマンの身体能力を遥かに上回る。後ろから迫るソウルイーターの靄に取り込まれるか、運良く逃れた者もデス・ナイトの振るう剣に一撃で命を奪われていった。

数時間後、戦場には静寂が訪れていた。そこに立つ者はソウルイーターとデス・ナイトのみ。そして、数えきれないほどの綺麗な遺体が横たわっていた。

アインズは戦場全体をゆっくりと眺めると左手に嵌めた『強欲』を掲げる。すると、戦場に横たわっている数えきれないほどの遺体から青い透けるような光が飛んできて『強欲』に吸い込まれていった。(おおー、こんなに溜まるなんてちよつと予想外だったな。溜まった経験ポイントは何に使おうか……)

アインズは予想以上の経験ポイントを得られて上機嫌であったが、思い出したようにシャルティアに〈伝言^{メッセージ}〉を送る。

「シャルティア、終わったぞ。戦場にある遺体の回収を任せる。私はこの国の女王に話があるのでな」

竜王国女王ドラウディロン・オーリウクルスは玉座の間でその時を待っていた。

王城の守備兵には魔導王をここまで案内するよう伝達している。

彼女は自分が選んだことにより齎された結果について考える。法国家から受けた恩よりも自国を存続させるため魔導国の力に頼ることを選んだ。

そして——国は救われた。想像以上の力をもって。

これが最善だ。バハルス帝国はアンデッドの力を使って、より強大な国になろうとしている。竜王国も、国民がこれ以上死ぬことは無いだろう。ビーストマンから受けた被害は甚大だ。なにしろ百万を超える民の命が失われたのだ……復興には時間がかかる。

彼女は物思いに耽っていると、隣に立つ青い顔をした宰相は話を切り出し難そうに、言葉をまとめることに苦戦していた様子だったが……やがて、ポツリと話し始めた。

「陛下……これからの国の事は重要ですが、まずは魔導王との会見を成功させることが最優先です。絶対に機嫌を損なわないよう細心の注意を払ってください。全ては魔導王の気分次第ですの」

「……そうだな。魔導王は私の姿はどちらが好みかな？ 一応男なのだろう？ ならば胸があつた方が——」

「アンデッドに性欲があるのかは分かりかねますが……少女の姿では舐められて国を任せる器とみられないかもしれません。確かにこちらの形態の方が良いかもしれませんがね」

「国を任せる、か。帝国の例があるし、もしかしたら自治を認めてくれる可能性もあるのだな？」

「それは帝国の皇帝が優秀だったから……かもしれません。そうであれば陛下は絶望的ですな」

宰相の軽口を聞いてドラウデイロンは固まった身体からようやく緊張が解けていくのを感じた。

「はあー、反論する気も起きないな。まあ魔導国の属国になればビーストマンは手を出してこないだろう。たとえ出してきたても魔導国が負ける未来が思い浮かばないがな……」

——ナザリック地下大墳墓の第九階層。アインズの部屋。

そこで遠隔視の鏡を使って主人の姿を追っていた階層守護者たち——シャルティアはナザリックの外で遺体の運送任務に就いていたが——は一息ついて歓談していた。

「ビーストマンの遺体も追加ですか……そろそろ第五階層で氷漬けにするのも手狭になってきましたね。コキュートスの居住区も圧迫するかもしれません」

「ナツ！ ソレハ困ル……」

「と、『図書館』のオーバーロードの方々にアンデッド作成を手伝ってもらったらどうでしょう？」

「それはいい考えね、マーレ。アインズ様が戻られたら相談してみましよう。」

——ところでデミウルゴス、あなたの説明は竜王国がどういう立場をとるか、ということについては触れていなかったけれど、皆に説明しないで良かったのかしら」

「私が先ほど説明したのは、アンデッドを使うメリットです。ナザリックの誰が動いても竜王国がどうなるかについては変わらないでしょう。その程度の事、主人の前でわざわざ説明することこそ不敬ですわね」

「ソ、ソノトオリダナ。ソノ程度ノコトヲ至高ノ御方ノ前デ話スコトデハナイ」

「だ、だよね！ ……でも、ちよつとくらい説明してくれても良かったんじゃないかなー」

帝国の騎士2

灼けるような日射しが照り付け、空には雲ひとつない夏の日の朝。まだ人気の少ないエ・ランテルの大通りを冒険者風の男が歩いていた。

フルプレート
全身鎧を身に着け、身の丈程のグレートソードを担ぐ、強者の風格を漂わせる厳めしい面貌の男。その男に睨まれば誰もが目をそらさずにはいられないだろう。

だが、それはかつてのエ・ランテルであればの話だ。

エ・ランテルが魔導国に取り込まれて以来、伝説級のアンデッドたちに慣れ親しんでいる住人にとっては気に留める程のものでもないのだが――

果物を店頭に並べていた店主はその男を見つけて声を掛けた。

「よお！ バジウツドの旦那、こんな朝早くからダンジョンかい？」

「おう、これが仕事なんでね。それより今日も暑くなりそうだから、親父もぶっ倒れないように気を付けな」

呼ばれた男――帝国四騎士の一人、『雷光』バジウツド・ペシユメル――は愛想よく返す。

バジウツドは果物屋の親父と仲が良い。客と喧嘩していたところを仲裁に入った事があり、それからの付き合いだ。

「旦那こそ大怪我すんなよ！ そうだ、これ一個持っていきな！」

店主は店頭に並べていたリンゴをバジウツドに放った。

「ありがとよ。それじゃ、また後でな」

親父に片手を挙げて別れを告げると、貰ったリンゴをかじりながら目的地――エ・ランテルの外に作られたダンジョンへ向かって歩き出す。

しかし、数歩も行かないうちに隣の安宿から出てきた冒険者らしき男たちに呼び止められる。

「おはようございます！ バジウツドさん、昨日はどうでした？」

——白金級プラチナに上がったばかりの冒険者チームだ。魔導国からの給金があるため金には困っていないはずだが、安宿の狭い一室でメンバー五人が共同生活している。其のためか突出した奴はいないがチームワークはかなりのものだ。まだまだ成長するだろう。

「分かってて訊いてんだろ……うまくいったらこんな朝早く起きてねえよ。また九階層どまりさ」

バジウツドは苦笑する。

エ・ランテルの郊外に作られたダンジョンは十階層で構成されており、未だに踏破したものはいない。

そのダンジョンの九階層に僅か一か月で辿り着いたのだが、それから一カ月経つというのに進展がないのだ。

「いやいや、九階層って凄いですよ！ 他にはモックナツクさんのところの『虹』だけなんですから。あ、もちろんダンジョン踏破の一番乗りは絶対バジウツドさんのとこだと思ってますけどね。それに——」

……話が長くなりそうだ。仲間を待たせていることを伝えて彼らに手を振った。

「先いくぜ。お前らも頑張んな」

居住区を抜ける門の前まで来ると、門の脇で男の子が泣いているのが見えた。傍には門番のデス・ナイトが困ったように首を傾げながら立ち往生している。

「どうした、坊主？」

理由を聞くと、どうやら親と一緒に買い物に来てはぐれたらしい。

「……仕方ねえな、一緒に探してやるよ」

そう言って男の子を片手で抱え上げると来た道を引き返し始めた。一瞬、彼を待っている仲間の顔——特にレイナースの冷やかな眼差し——が脳裏をよぎったが放っては置けない。

「おーい……この子の親はいないか？」

ダミ声ではあるがよく通る声を張り上げながら、人が増えてきた大通りを歩く。リングゴをくれた店の近くまで来たときによく母親

が見つかった。

「本当にありがとうございました……バジウツドさん」

バジウツドは少し考えたが、この母親のことは記憶にない。

「悪いがあんたの顔は覚えてねえな」

すると母親は可笑しそうに笑いながら応えた。

「この街でモモンさんとバジウツドさんの事を知らない人なんていませんよ」

豪胆なバジウツドであるが、さすがにあの大英雄と並べられては気恥ずかしさを隠せなかった。

そそくさと母親と子供に片手を挙げて別れを告げると、急いでダンジョンを目指した。

その後も幾人もの人々に声を掛けられては律儀に手を挙げて挨拶を返していった。

——エ・ランテルに来てから二ヶ月。

バジウツドはエ・ランテルという街にすっかり溶け込んでいた。

エ・ランテルでは様々な種族——人間種、ゴブリンなどの亜人種、ア宁德ツド——が混在しながらも、種族の違いによる差別もなく住民は生き生きしている。冒険者は未知への冒険という夢のために日夜励んでいる。

当然、ここには帝国四騎士の肩書きを気にするものはいない。

バジウツドはこの街と今の生活を気に入っていた。

——エ・ランテル郊外のダンジョン入り口。

約束の時間から大分遅れてダンジョンの入り口に着くと、彼の仲間

——『激風』ニンブルと『重爆』レイナース——が待っていた。

ちらっとレイナースを横目で見る……仁王立ちだ。腕を組み微動だにしない。

(……レイナースの奴、メチャクチャ怒ってるな)

とても話し掛けられる雰囲気ではなかったが、こうしていても時間

は過ぎていくばかり。覚悟を決めると深く息を吸い込む。

「すまん！遅くなった！」

踵を付けて深々と腰を曲げる——見事なお辞儀だ。バジウツドは帝国四騎士の筆頭、そして皇帝の側近でもある。だが、自分の非をきちんと認めて謝罪ができる男だ。

そんな様子を見ていたニンブルが苦笑しながら話し掛けてくる。

「もう慣れましたからね、私は気にしてませ——」

「——いい加減にして欲しいですわ」

レイナースは冷ややかな眼差しでバジウツドを睨んでいた。彼女の言葉に被せられたニンブルは瞠目して押し黙ってしまった。もはや援護は期待できない。

(これはマズイな……)

瞬時に判断したバジウツドは行動に移す——

「すまなかった！」

いろいろ試した結果、彼女の機嫌を宥めるにはこうするしかなくなった——即ち、ひたすら頭を下げる。間違っても容姿を誉めるようなことは言つてはいけない。

彼女は三人の中でも特にダンジョン踏破に拘っていた。執念と言いかえても過言ではない。己に掛けられた呪いを解くためにダンジョンを踏破し、褒美として魔導王に呪いを解いてもらう——それが彼女の願い。つまり、怒るのは当たり前だ。

矢継ぎ早に繰り出される彼女の苦情を受け止めながら、バジウツドはここに来た経緯を思い返していた。

——帝国の重鎮である彼らがエ・ランテルに滞在しているのには理由がある。

二か月前、彼らの主人——バハルス帝国の皇帝ジルクニフ——から、ダンジョンを踏破するまで戻ってくるな、と申し付けられたのだ。

その話を皇帝から笑顔で切り出されたときには理由を問はずと必死に詰め寄った。あの魔導王が作ったダンジョンを人間が踏破できるとは到底思えなかったから——正確には、非力な四騎士の解雇

通達と考えたから。

四騎士を鍛えるため、配置された敵もデス・ナイトより遙かに劣るものと聞いて、ようやく安堵してエ・ランテルにやってきたのだ。

とはいえ、今まで四騎士でチームを組んだ経験はフルーダとの模擬戦で一時的に組んだくらいだ。

ニンブルは良い奴だが、レイナース……正直、苦手な部類に入る。だが、チーム形成はリーダーの責務だ。陛下の期待に応えるため、チームとして難度の高いミッションを乗り越えなければならぬ。いや、乗り越えようと心に誓った。

しかし……現実はなかなか思い通りにはいかないものだ。

——レイナースの苦情が止まった。

頭を下げてそのまま上目遣いに彼女の様子を窺えば、まだまだ言い足りないといった表情だったが、彼女もこれ以上は意味が無いと分かっているのだろう。

バジウツドは顔をあげると、コホンと咳払いした……気まずい。それでも言わなければならぬ。

「二人とも！ 今日こそは十階層に到達しようぜ！」

——これが今の帝国四騎士の日常だった——

——ダンジョン九階層。

ダンジョン入り口のログハウスに設定してある木枠のようなマジックアイテムの間を通り抜ければ目的の階層に移動できるようになっている。もちろん、移動が許されるのは自力で辿り着いた階層だけだ。

「昼間は街中にいるよりダンジョンの方が快適だな」

魔法の明かりが灯されている薄暗い岩壁の通路を慎重に進んでいく。

先頭を歩くのはバジウツドだ。彼は索敵や罠外しのスキルをこのダンジョンで習得していた。たとえ罠解除に失敗しても体力の高い

彼ならば安心だ。

来たばかりの頃、盗賊系スキルを持たない彼らはことごとく罠に引つ掛かり盗賊系スキルの重要さを痛感した。そして、魔法を使えないバジウツドが担当するのは自然の流れだった。

何度も失敗しながらも短期間で盗賊系スキルを習得したのは感嘆に値するだろう。

「確かに、ダンジョンは涼しくて助かりますね。蒸し暑い中で肉が溶けかかったようなアンデッドと組み合いたくはありませんからね」

「むしろ踏破するまではダンジョンで生活したいくらいだわ。……バジウツド、もう少し早く進みなさいよ。日が暮れるわよ」

バジウツドは苛立たし気なレイナースに向き直ると彼女をなだめる。

「分かっているって。だが、急いでもダンジョンに潜れるのは一日一回って決まっているだろう？ 失敗しないように慎重に行こうぜ」

厳つい面貌のバジウツドだが意外にも空気を読み、周りに対する気配りが上手かった。帝国で彼の帰りを待っている妻たちとの生活や皇帝の側近としての経験が活かされているのかもしれない。

暫く進むと広間に出た。今回はここにボロボロの真紅のマントを羽織り、魔法のブレスト・プレートとラウンド・シールドを装備した骸骨戦士ナザリック・エルダーガードが二体いたはずだが……今回は見当たらない。

カツツエ平野では何度か骸骨戦士を討伐したことがあるが、ここにいる骸骨戦士は魔法の武器を持つ上に剣の腕も比較にならない。

それでもバジウツド達ならば、一対一なら武技や魔法を使わずともなんとか勝てる強さだ。

「こんな見晴らしの良いところに罠も無いでしょ？ 進みますわ」
バジウツドが広間の様子を慎重に窺っていると、レイナースが我慢しきれずに広間の中央を歩いていく。

「おいおい、ちよっと待って——」

慌てて後を追うとレイナースが広間の中央に差し掛かろうという

ところで、天井に黒い穴が開きそこから二体の骸骨戦士が落ちてきた。狙いはレイナースだ。

レイナースも一瞬遅れて気付いたようだが上空からの奇襲に対応しきれていない。

「させるかよっ!! 〈流水加速〉、〈神技一閃〉」

駆け寄りながらグレートソードを引き抜く、と同時に武技を発動する。閃光のような剣速で落下中の二体まとめて叩きつける。一体は壁際に吹き飛ばし、もう一体はそのまま地面に叩きつけた。

（――効いているようだが、まだ動くか！）

壁際に吹き飛んだ一体にニンブルが駆け寄り、手にもつロングソードで追い討ちをかけていく。

ニンブルは剣技において四騎士最強だ。まさしく激風の如くフェイントを混ぜながら上下左右に打ち込んで骸骨戦士を防戦一方に追い込んでいく。

もう一体はレイナースが相手だ。手にもつハルバードの先端の斧で立ち上がりとしている骸骨戦士の頭部を目掛けて振り降ろす――が、盾で防がれて魔法の武器同士の接触により激しい光が飛び散る。

しかし、無防備になったその瞬間をバジウッドは見逃さない。狙いを定めると横払いで首を刎ねた。

骸骨戦士は首を失ってなお戦闘を継続する意思を示すが、先程とは比べようもなく動きは緩慢だ。油断せずバラバラに砕いていった。

ニンブルを見ると、彼も同じように骸骨戦士を砕いているところだった。

「……………ごめんなさい。軽率でしたわ」

珍しく殊勝なレイナースの態度に面喰い、ニンブルと顔を見合わせて苦笑いした。

「さすがに俺も肝を冷やしたぜ……………こんな悪質な罠を仕掛けてくるなんてダンジョンの主は性格歪んで――」

そのときニンブルが大きく咳払いすると声のトーンを落として話しかけてくる。

(聞かれてる可能性が高いですよ。会話には気を付けてください)

迷宮の主を刺激して罨や敵を増やされたらたまったものではない。慎重なニンブルに感謝しつつ、自分もレイナースを刺激しないよう慎重に言葉を選ぶ。

「……まあ、あれだ。俺も少し油断してたかもしれない。最初に吹っ飛ばせたから楽になったのは良かったな」

レイナースは神官系の魔法も使えるため対アンデッドは得意分野だ。事実、彼女がいなければ九階層まで辿り着けなかったに違いない。

だから、心のどこかでバジウツドを見下していたのだろう。それが今回彼女が招いた危機によって逆にチームの結束が高まったかもしれない。

バジウツドはようやくやくチームになれたという手ごたえを感じた。

その後もバジウツドは策敵スキルをフルに使ってダンジョンを慎重に進んでいく。何度も来た経験から敵に遭遇しないルートは分かっている。レイナースはもう文句を言ってこない。

——やがて九階層最奥の広間に到達した。

広間の中央にいるのは今までの骸骨戦士とは格が違う、フル・プレート全身鎧に身を包んだ骸骨戦士一体とエルダーリツチが二体だ。敵の数はメンバーの数に応じて増減するように設置されているのだが、そのことは冒険者には明かされていない。

「準備を始めてくれ」

ここからが本番だ。

ニンブルとレイナースは頷くと強化魔法を掛け始めた。

「〈レジスト・エナジー属性への抵抗〉、〈コンセクレイト聖別〉、——」

バジウツドたちの幾度目かの挑戦が始まろうとしていた——。

「おーい！ バジウッドさん達が十階層に到達したってよ!!」

十階層到達——この報が伝わると、ダンジョン前で突入待ちをしていた多くの冒険者チームが歓声を挙げ、辺りは熱気に包まれた。

傷の治療を終えたバジウッド達がログハウスから出てくると、冒険者たちは口々に彼らの偉業を称えた。

バジウッド達は手を挙げて歓声に応えていった。レイナースも……引きつった笑顔で冒険者たちに応じているので満更でもなさそうだ。

後ひとつ、残すは十階層のみだ。終われば妻たちや陛下の待つ帝国に帰れる。嬉しい。嬉しい……はずだ。

歓声に応えながら、バジウッドは胸につかえる微かな違和感の正体を掴み兼ねていた。

そんな彼に声を掛けてくる者がいた。

「おめでどう、バジウッド。先に行かれちゃったな」

声を掛けてきたのはオリハルコン級冒険者チーム『虹』のモックナックだ。彼はダンジョンの攻略を競い合う良きライバルであり、飲み仲間でもあった。

「……ああ、ありがとよ」

「どうした？ お前らしくないな。嬉しくないのか？」

彼の反応に違和感を覚えたようにモックナックが首を傾げる。

「気にすんな、ちよつと疲れただけだ」

少しの間、俯いて何事かを考え込んでいたモックナックはバジウッドに向き直った。

「……バジウッド、ちよつと付き合ってくれ」

バジウッドとモックナックはダンジョン前の喧噪から少し離れた場所に移動する。モックナックが立ち止まるところちらに振り返って話し始めた。

「俺たちはもうすぐ冒険に出る」

「おいおい、ダンジョン攻略は諦めるのか？」

「仲間たちが早く冒険に出たいって聞かなくてな……ダンジョンは戻ってからまた挑戦するつもりだ」

そこで一息吐いた後、モックナツクは真剣な表情で問いかけてきた。

「バジウツド、冒険者に興味は無いか？ ……出来れば俺たちのチームに入って欲しい」

突然の申し出にバジウツドは驚きを隠せなかった。チーム『虹』で純粋な戦士はモックナツクだけだ。だがオリハルコン級まで上り詰めたチームに自分は必須ではないだろう。それに――

「……何言ってるんだ。俺は帝国四騎士の一人で皇帝陛下の側近だぞ？

国には妻たちも俺の帰りを待ってるんだ」

「知ってるさ。だが、お前にはこっちの方が合ってると思うんだ。お前もそう思うから迷ってるんじゃないのか？ ……返事はそのうちで構わない。まあ、まずはダンジョンを踏破だろう。帝国に戻ってからもゆつくり考えてくれれば良いさ」

モックナツクと別れた後、レイナースとニンプルに明日の集合時間を伝えて宿に戻った。宴を開こうと多くの者が声を掛けてきたが、バジウツドはそんな気分になれないため丁重に断っていた。

バジウツドはベッドに寝転ぶとエ・ランテルに来てからのことを思い返していた。

――ダンジョン攻略では新しいスキルも覚えた。冒険者たちや街の住人たちと親しくなった。めでたい時には飲んで馬鹿騒ぎし、誰かが悩んでいれば親身に相談にのることもあった。

――楽しかった。
……それもダンジョンを踏破すれば終わりだ。祖国には待つている人たちがいる。

バジウツドは正直に言うとう冒険者に魅力を感じていた。自分に一番合った生き方なのではないか？ 気心の知れた仲間たちとともに未知の領域を目指す。冒険に疲れたら家族のもとに帰ってのんびり

したり、自分や他の冒険者の冒険譚を酒の肴にして語り合い、また未知を求めて冒険に出る——それはとても素晴らしいことのように思えた。

鬱屈した思いを抱えたまま、バジウツドは眠りについた。

その日の夜、バジウツドは夢を見た——子供のころの記憶だ。

バハルス帝国の貧民街に生まれたバジウツドは、常に死と隣り合わせの生活だった。物心がつく前から盗み、恐喝など生きるためにやってきた。時には盗みに入った貴族の家の用心棒たちに捕まり殺されかけたことも何度もある。

そんな心を擦り減らす生活を送っていた彼にも夢があった。それは、家から遥か遠くに見える皇城——いつかあの城で働く騎士になること。ただの騎士ではない。誰にも負けない騎士になる。そのためには強くならなくてはならない。

そう信じて強く成長していった。そして——ジルクニフに出会った。不敵な笑みを浮かべる傲岸不遜という言葉が相応しい男。

最初はただ騎士になれば権力者のこと等どうでも良いと思っていたが、ジルクニフは違った。

どんな危機に陥っても堂々とした振る舞いを崩さず、時には王国との戦争で最前線に立つこともあった彼に、気付けば心から忠誠を誓うようになっていた——

——目が覚めた。

思い出した。自分が何を求めていたのかを。何を大切にすべきかを。

この街での出来事は泡沫の夢のようなものだ。だが、夢はまだ終わっていない。

この甘い夢を終わらせて、そして——日常に戻ろう。

ダンジョン入り口の前ではニンブルとレイナースが若干緊張した面持ちで彼を見ている。バジウツドは彼らに向かって近づいていくと、最後になるかもしれない出発の宣言をした。

「次があるとか考えんな。最期だと思つて気を引き締めていこうぜ」
様々な想いを抱きながら、彼らは前人未踏の十階層を進んでいった

王国の吸血姫Ⅰ

竜王国の一件から数日後、アインズは自室のベッドで仰向けに寝転がりながら竜王国の事を思い返していた。

(帝国に続いて竜王国まで属国か……魔導国が脅して従わせてるみたいだな)

アインズは竜王国とは友好的に付き合っていく考えだった。力で従わせてばかりでは敵対する存在を増やしてしまうだろう。

だからこそ、魔導国と付き合うメリットを提示するためにアンデツドのデモンストレーションを行ったのだが——竜王国女王からの申し出は「属国化」だった。

(考えてみれば当然か——)

竜王国が手も足も出せなかったビーストマンの大群。それを一方的に虐殺する力を目の当たりにしたとき、竜王国民は何を思っただろうか。

生き残ったとはいえ、民も物資も、もはや国と呼べない程に失われ、復興には膨大な時間を要するに違いない。そして、もう一度攻められれば今度こそ終わりだ。

……誰がこの状態で対等の国交を申し出ることが出来るだろうか。だが——

(——間違えてはいない……はずだ)

アインズの思惑はどうであれ、竜王国は救われたのだ。

破壊された都市にはゴーレムを送り込んで復興させる。食糧が足りなければ、丁度収穫の季節だ。大量の農作物を送る手筈を整えよう。外敵に対しては既にアンデツドの軍を国境に展開済みだ。

(……とりあえず、人間に友好的な国は魔導国に対して悪いイメージを持たないと思うが……ギルドの仲間たちがいたらどうしていただろうか)

——今も色褪せることのない輝かしい記憶——アインズ・ウール・ゴウンの黄金時代。四十一人のギルドメンバーは意見が割れることが多く、多数決で方針を決めていた。

ギルド長とは名ばかりの調整役に過ぎなかった自分が、今はたった一人で国家の方針を決めなければならぬ。

その時、カーテンの隙間から朝日が射し込んできた。アインズは起き上がると、窓の外に広がる朝焼けの空を眺める。

「アインズ様、時間になりましたので次の者を呼んで参ります」

「……うむ、ご苦労」

短く返答すると、お辞儀をして部屋を出ていくメイドの後ろ姿を優しげな眼差しで見送る。

（仲間が残してくれたNPCたちは、必ず俺が守る。たとえこの世界の者たちがどれほど苦しむことになるうとも……ナザリックを脅かす存在は排除しなければならない）

決意を新たに意識を警戒すべき存在に向ける。アインズは現時点で警戒すべき存在は「二つ」と考えている。

プレイヤーが存在する可能性が高いスレイン王国。フルーダの話では「神人」という六大神の子孫の中で神の力に目覚めた者がそう呼ばれているらしい。

そして、ブラチナム・ドラゴンロード白金の竜王ワイルド・マジック擁する評議国。国民は多様な亜人種で構成され、竜王は「始源の魔法」と呼ばれる、位階魔法とは全く異なる魔法を使うようだ。

（まずはスレイン王国だ。アインズ・ウール・ゴウンに敵対するプレイヤーがいたとしても、国として交渉に当たれば極端な行動には出ないはずだ。友好的に接して徐々に秘匿する戦力を暴き出してやる。

拒絶するなら……ヤルダバオトを使うか。デミウルゴスを前面に出さないようにする工夫が必要だが、やってみる価値はあるな。

評議国は始源の魔法の情報が欲しい。それまでは迂闊に手を出すべきでは——）

そこまで考えてある事に思い至った。

竜王国の女王は七彩の竜王の末裔であり、ワイルド・マジック始源の魔法を使える、と聞いたことを。

エ・ランテルの門を抜けて街に入ると、強大なアンデッドが蠢く悪夢のような景色が広がっていた。ラキユースたちの顔が青ざめた。

「……変わらないわね、この街の空は——」

ラキユースが視界に入ったものを避けるように空を見上げて呟いた。

「ボスの顔色も空と同じ色」

「冗談言ってる場合じゃない。真面目に周りを見るべき」

街の風景から目を背けようとするラキユースの言葉に、周囲を警戒していたティアとティナが反応する。

「噂には聞いてたけどよ……この街はどうなっていやがるんだ？

さつきから鳥肌が治まらねえぞ」

並んで歩くガガーランが緊張した声で話し掛けてくる。一流の戦士としての本能が警鐘を鳴らしているのだろう。

「無理もあるまい。どのアンデッドもお前たちより強いぞ……まあ、私ほどではないがな。だが、戦闘になったらこの数は厳しい。いつでも逃げられるように私の側を離れるなよ」

イビルアイの普段通りの言葉に頼もしさを感じて、ラキユースたちは内心で安堵する。彼女はチームの最大戦力であり、彼女に余裕があれば何とかなると思えたからだ。

彼女たち——アダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』——がエ・ランテルに来た理由、それは魔導王の配下についたモモンが、これからのように行動するかを確認するため、という事になっている。「あれ程の大英雄がいつまでも魔王にかしずいている訳がない。もしかしたら我々——いや、私の助けを待っているのかもしれない——いや、違くない！」

そのようにエ・ランテル行きを熱望するイビルアイに圧されてしまったては放っておく訳にもいかない。

それにエ・ランテルの現状も直接見ておく必要があると考えていた。

「まずはモモン様の所だ、急ぐぞ！」

イビルアイは未だ緊張する仲間たちを励ますように、そして、自らの胸の熱情を解き放つように力強く言った。

（――魔導王。この程度のアンデッドでは私は止められんぞ。私の方への思いは、な――モモン様、いま会いに行きます）

モモンの屋敷前に辿り着いてイビルアイが門番のデス・ナイトに用件を告げる。すると中庭から一体のアンデッドがこちらに近付いてきた。

それが視界に入った瞬間――モモンの屋敷へ近づくに連れて高鳴っていたイビルアイの心に冷水を浴びせかけた。

（まっ、まずいぞ!!）

やって来たアンデッド――地下聖堂クリプトロードの王――は遠目から見てもイビルアイの力を遥かに超える気配を漂わせていたのだ。

（おのれ魔導王め……！　まさか私もラキユース達と同様の恐怖を味わうことになるとはな！）

先ほどまでの余裕が消えたイビルアイの様子に、ラキユースたちも顔を見合わせて青ざめていった。

……戦う訳にはいかない。イビルアイが戦う意思を見せれば、たとえ勝率がゼロでもラキユース達は供に戦う決心を固めるだろう。

（……落ち着け。奴はモモン様の自宅を守る門番に過ぎない。これは交渉なのだ）

自分に言い聞かせながらその時を待つ。かつて見た圧倒的な存在――モモンとヤルダバオト――の姿が脳裏に過る。やがて、そのアン

デッドがイビルアイの前で止まった。

（何という禍々しい表情だ）

イビルアイは邪悪な笑みを浮かべる者の顔を真つ直ぐに見据えると、仮面の奥で深く息を吸い――呼吸不要な身体だが――口を開く。

「モ、モモン様は――」

「――」

焦りと恐れの為、イビルアイは言葉に詰まって用件がうまく伝えられない――しかし、それを見透かしたかのように、そのアンデッドは

噎れた声でモモンが街の見廻りに出掛けた事や何時頃戻る予定かを丁寧の説明した。

イビルアイたちはぎこちなく謝辞を述べると、そのアンデッドはニヤリと嗤って再び中庭の方へ戻っていった。張り詰めた空気が薄らいでいくと、イビルアイは肩の力を抜いて一息ついた。

「……なんと邪悪なアンデッドだ。ヤルダバオト程では無いが、魔神を確実に超える存在だったぞ。戦闘になったら全員で戦っても恐らく勝てない——だが、あれ程の化物は他にはいないだろう。あれこそ魔導王の切り札に違いない」

イビルアイの普段と異なる弱気な言葉に一抹の不安を感じつつ、ラキユース達は再び市街地へ戻っていった。

「見ろよ、あれって蒼の薔薇じゃないか?」「魔導国に何の用だ?討伐するモンスターなんてこの辺りにはいないだろ?」「まさか、魔導王を討伐に来たんじゃ……」「おいおい、いくら蒼の薔薇でも人間だぞ?勝ち目が無い戦いを挑む程馬鹿じゃないさ」「じゃあ、蒼の薔薇も魔導国の冒険者になるつもりだとか……」

通りすがりの冒険者たちが、彼女たちを遠目に見つけては勝手なことを口走っていた。だが、彼女たちはそんな事は気にしていない。逆に冒険者達に対して気になることがあったからだ。

「だけどよお……この街の住人は平気なのか? こんなにヤバイアンデッドがうようよしてんのに」

「この街の住民は皆、ガガーランより強靱な精神力の持ち主」

「違うな、この街には大英雄であるモモン様が居られるからだ。モモン様の存在が魔導王への抑止力となっているからこそ、住民は安心して暮らせているのだ」

イビルアイはモモンの功績だと誇らし気に語るが、ラキユースは首を捻っていた。

「そうかもしれないけど……あまりアンデッドを怖がっているようには見えないわね……」

ふと周りを見れば、近くの店の前で年配の店長らしき男が荷車をひ

くソウルイーターに指示を出す姿が見えた。黙って頷くソウルイーターの姿はどこか微笑ましく——見えてしまった。

「……まずはモモン様に会ってからだ」

イビルアイがそう締め括ったとき、こちらに向かって歩いてくる漆黒の戦士の姿が見えた。

モモン——パンドラズ・アクターが変身した姿——は街の見廻りのため市街地を歩いていた。今はナーベもハムスケも連れていない。

最近是不満を訴える者も少なくなり、一時期はこうして見廻る機会は減っていたのだが、ある事が切っ掛けとなって今は毎日見廻りを欠かしていない。

(この街が平和であるのは偉大なるアインズ様——いえ、父上の温情の賜物でしょう……しかし、何も無いというのも些か困りものですね)

パンドラズ・アクターは自分の役割について考える。

当初はモモンとしてエ・ランテルの住民から情報を集めることこそ至高の御方に与えられた役割と考え、役割を全うする喜びに満ち溢れていた。

しかし、あるとき父であるアインズに”成長の証を見せろ”と言われたのだ。

そのためには与えられた役割をこなしているだけでは足りない。今まで以上に行動してナザリックに利益を齎さなければ、と。今では大好きな宝物殿での作業時間を減らして、少しでも有益な情報を集めようと街の巡回に励んでいるのだ。

あの時の胸を打つような衝撃は今もパンドラズ・アクターの心に疼いている。

——自分はナザリックにおいて創造主を持つ唯一の存在、そして至高の創造主に”子”として認められた”特別”な存在なのだ。

自らの館に帰る途中、前方に冒険者達が集まっているのが見えた。

近くの冒険者に何かあったのかと声を掛ける。

「あ、モモンさん！ 見てくださいよ、蒼の薔薇が来てるんです」

（——蒼の薔薇。確かエントマ嬢を瀕死の状態にまで追い詰めた”敵”）

バンドラズ・アクターはゆっくりと彼女たちに近付いていった。胸の奥に”敵意”とそれに勝る”興味”を隠して——。

「モモン様！」

モモンの姿を見つけると、イビルアイを先頭にラキユースたちもモモンに駆け寄った。

「お久しぶりです、モモン様」

モモンに抱きつきたい衝動を必死で抑え込み目前で立ち止まると、ローブの裾を持ちあげてゆっくりお辞儀する。淑女たるもの人前ではしたない真似は避けるべきと、ラキユースに学んでいたからだ。

「お久しぶりですね、蒼の薔薇の皆さん。ヤルダバオトの一件以来ですから……大体一年ぶりでしょうか」

モモンの柔らかくも力を感じさせる口調に、彼女たちはこの街に来て以来、初めて心の底から安堵した。

「ここでは目立ちますので、場所を変えましょうか」

そう言って歩き出すモモン。イビルアイたちはその後が続いた。

『黄金の輝き亭』は多くの冒険者たちで賑わっていた。正式に魔導国の冒険者と認められた彼らは国から相当な金品を支給されているため、エ・ランテル最上級の宿屋でも食事を楽しむことができるのだ。しかし、モモンと蒼の薔薇が現れると場は静まり返った。モモンが店員の一人に何かを告げて、そのまま二階の一室に入っていくまで静寂は保たれた。

全員がテーブルを囲んで椅子に腰かけると蒼の薔薇のリーダーであるラキユースが話し始めた。

「では改めまして、モモンさん。お忙しいところ申し訳ありません」

「いえ、私もちやうど帰るところでしたので……それより皆さんがエ・ランテルまで来られた理由を伺っても宜しいでしょうか」

モモンの言葉を聞いて、イビルアイが身を乗り出す。

「モモン様！ モモン様はいつまで魔導王の下に就いているつもりですか!? 何か困っていることが——」

「イビルアイ、順番に話をしようぜ？ 落ち着きの無い女は犬も食わねえ、つてな……モモンさんに嫌われちまうぞ？」

ニヤリと笑うガガーランの言葉にびくつと反応してイビルアイが身を引くのを横目で見ながらラクキュースが続けた。

「私達がここに来た理由は他でもありません。モモンさん、あなたが魔導国、いえ、魔導王についてどのよう感じているのか、そしてこれから何をしようとしているのかを伺うためです」

モモンは暫し考える素振りを見せたが、すぐにクロースト・ヘルム面貌付き兜の奥から声が響く。

「——私はエ・ランテルを、いや、魔導国を理想的な国だと考えています。皆が知つての通り魔導王は生者を呪うアンデッド。エ・ランテルが占領された日、私も街の住人の安全を考えて魔導王の提示した条件を飲みました。しかし、その後の魔導王の統治はアンデッドとは思えないほど、どの国よりも平和を齎しています。魔導王は敵ではないでしょう……いまのところは、ですが」

「いまのところ、ということとは将来的にはまだ敵となる可能性があるということでしょうか？」

「魔導国が建国してからまだ日が浅いですからね。もう少し様子を見る必要があるでしょう」

その言葉にラクキュースたちは納得する。では次に……とモモンへ提案を口にする——前にモモンからの意外な提案を受けて、彼女たちは驚きのあまり目を丸くした。

「……とは言え、今後何かがあったときに私やナーベだけでは魔導王やその配下の者を抑えることは難しいでしょう。可能であれば皆さんのお力をお借りしたいと考えています」

天地程も力量差がある彼の大英雄から協力を申し入れられたのだ。

すぐさまイビルアイが——ポカーンとしている仲間を無視して——飛び付いた。

「もちろん！ 最大限協力しますとも！」

その返答に満足気に頷くモモン。

「では、定期的に連絡を取り合える手段を確立したいのですが……」

モモンの言葉によりやく思考が戻ってきたラクユースが返答する。

「それではイビルアイが転移の魔法が使えますので彼女に任せます

……イビルアイ、良いかしら？」

「任せておけ！」

モモンはイビルアイに向き直ると頭を下げた。

「——イビルアイ、今後とも宜しく頼む」

王都への帰路、イビルアイはまさに天にも昇る心地だった。何しろ

あのモモンから定期的に会うことを約束されたのだ。それも公式に。

「うふふふ……」

「良かったじゃねえか！ まじでこんな展開になるとはな」

ガガーランが満面の笑みを浮かべてイビルアイの背中をバシバシ

叩いていたが、顔を空に向け未だ夢見心地のイビルアイは全く反応し

ない。

「……驚いた。本当にあの大英雄とイビルアイがくつつく可能性が出

てきた」

「油断大敵。初恋は実らないもの」

「ティア、初恋が実るように私たちもサポートしてあげましょうよ

……」

ティアが不吉なことを呟くが、今のイビルアイの思考に入り込む余

地はなかった。

イビルアイは先程自分に向けられていたモモンの視線を思い出し

て胸を高鳴らせていたのだから。

(話している間、モモン様は私の方を何度も見ていた——これが「脈あ

り」と言うものに違いない！)

「――父上は『蒼の薔薇』について、どのようなにお考えでしょうか」

モモンの変身を解いた軍服姿のパンドラズ・アクターはアインズの執務室に入ると、椅子に座るアインズの正面から机に手をつけて身を乗り出した。僅かに身を後ろに反らしてアインズが返答する。

「……蒼の薔薇？ 詳しくは知らないが、王国で進行中のアルベド達の計画に関係する可能性が高いため計画が完了するまでは放っておくつもりだが」

「なるほど。では、その後はいかが致しますか？」

アインズの眼に殺気が籠もる。

「無論、エントマの願いを叶えるべく動くつもりだ。奴らはエントマの素顔も見ているため、放置しておくでエントマを表に出しにくいしな」

パンドラズ・アクターは黙って頷くとアインズに申し出た。

「父上、蒼の薔薇の件、私にお任せいただけませんか。決して父上に不利益を齎すような事態には致しません」

「ん？……分からんな、奴等を取り込んだとしても大したメリットは無いと思うが」

パンドラズ・アクターはイビルアイが身に付けていた指輪を思い返す。マジックアイテムに造詣が深いパンドラズ・アクターは、あれが力や存在を隠蔽する類いのものであることに気づいていた。

「少し気になる事があるのです。もしかしたらメリットにはならないかもしれませんが、その時は私が――」

「よし、そこまで言うのであればお前に任せよう。期待しているぞ――」

「パンドラズ・アクター」

(Wen^我nes^がmei^神nes^のGot^望tes^みWil^とle^あ)

パンドラズ・アクターは心の中で高らかに宣言し、神にも等しい父に向かって無言で敬礼した。

王国の吸血姫2

「……おかしくはないか？」

イビルアイは自らの格好を気にして隣に立つアンデッドに意見を求めた。

隣に立つアンデッド——すっかり顔馴染みになった地下聖堂クリプトローブの王——は落ち窪んだ眼を凝らして見つめてくるが、漆黒のローブで全身をすつぽり覆った装いにはやはり違いが見られないようだ。

僅かに落胆したが、そもそも吸血鬼ヴァンパイアとして二百五十年以上も色恋に無縁だったのだ。今さら見栄を張ったところで何の意味があるのか。

……いつその事気付かれないほうが——と考え始めた丁度その時、中庭の奥に佇む屋敷の扉が開かれる音がする。イビルアイは落胆していたことも忘れて、勢い良く向き直ると彼の名を呼んだ。

「モモン様——！」

姿を見せた彼——モモンはイビルアイの前に来ると肩を竦めた。

「——イビルアイ、いい加減”様”付けはやめないか？」

「え？あ……う、うむ。では………モモン」

突然の事で思考が追いつかないまま彼の名を呟く。

その直後、モモンの言葉の意味することに気付いて恥ずかしさに悶える。イビルアイは身に付けた仮面に心から感謝した。弛んだ素顔をモモンに見せずに済んだのだから——もつとも、悶える姿を既に晒していたのだが、それは全く頭に無かった。

（あのナーベさんですら呼び捨てを許されていないのだ。つまり私は呼び捨てを許された唯一の女……これは、もはや恋人同士と言っても過言では無いな？）

「すまん、ナーベさん」と心の中で謝罪しながら、ふと顔を上げれば——目の前に出現したモモンの顔に「うわっ」と声を漏らして仰け反った。

「——美しい髪飾りだな、よく似合っているぞ」

その言葉にイビルアイの心は完全に打ちのめされた。

モモンは気付いたのだ。仮面とローブの隙間——自分には似合わ

ないだろうと遠慮がちに挿した水晶の髪飾りに。

「そ、そうか……ありがとう」

嬉しさと気恥ずかしさが相まって——高鳴る鼓動は無いが——胸がはち切れそうだ。

もう堪えられないとばかりにモモンの右手を胸に抱き込むと、彼の手をぐいぐい引いて歩き出した。

「モモンさ——あ、行くぞ！ 今日旧スラム街方面を見廻る予定だったな!？」

「そのつもりだが……何か急ぎの用事でもあるのか？ 無理に付き合う必要は——」

焦りのあまりモモンに勘違いさせてしまった事に気づく。

「何も無いぞ！ あつたとしても全く問題無かろう！」

「そうか、ならば急ぐ必要はないぞ。急いで通り過ぎては住民の声も聴けないからな」

「では、ゆっくりいくとしよう！」

イビルアイはモモンの腕を抱き締めながら、仮面の奥で満面の笑みを浮かべた。

道行く者の吐く息は白く、肌寒い冬の日の昼下がり。イビルアイはエ・ランテルを訪れていた。

来訪の理由はあくまでもチーム『漆黒』と『蒼の薔薇』の情報交換のためだ、とイビルアイは自信をもって語る。これは仲間たちも認める、自分にしか出来ない”仕事”である、と。勿論、モモンに会いたかったから、という個人的な事情も多分に含まれていたのだが。

そんな彼女に問題があるとすれば、その頻度であろう。モモンとの協力関係を約束してからというもの、イビルアイは三日とおかずエ・ランテルを訪れていたのだから。

エ・ランテルでイビルアイを知る者は古参の冒険者くらいだろう。そのため、モモンにまわりつく仮面の少女は姿を見せなくなったナーベに替わる新しいパートナーでは、と噂された。イビルアイがナーベを追い出したとナーベのファンに噂を広められたこともあつ

だが、モモンからナーベは任務中で一時的に離れただけだと説明があったので事なきを得ていた。

そんな周りの思惑など意に介さないイビルアイと、周囲に気を配るモモンはいつものように並んで歩く。

ふと、モモンは思い出したかのように懐から何かを取り出すとイビルアイに差し出してきた。

「いつも来てもらっている礼だ。良ければ着けてくれ」

「うむ……………えっ?」

——それは琥珀色に輝く宝石が付いた指輪だった。

(こ、これは!・ 話に聞く”求婚の証”なるものではないか!?!…………いや、待て、落ち着け!” 礼”と言っていたではないか!)

穏やかならざる心情で差し出された指輪を恐る恐る受け取る。モモンからの初めての贈り物だった。

「魔術師ギルドの新商品だ。微弱ながら幸運を上げる効果があるそうだ」

「ありがとう……………大切にする」

嵌める指は勿論、最も効果が高いとされる左手の薬指だ。イビルアイは意気揚々と左手の薬指に嵌めていた指輪を外そうと指輪に手を掛け——動きを止めた。

モモンの視線が嵌めている指輪に向けられていることに気づいたからだ。

——言ってしまうのか。この指輪は自分の、吸血鬼ヴァンパイアの気配を隠すためのものだ。

自分が如何なる存在であろうともモモンなら気にしないはずだ。だが、万が一今の関係が壊れてしまったら…………いや、これは避けては通れないこと。いつまでも正体を隠したままモモンと付き合っているはずがない。

意を決して指輪を外そうとした時——モモンが彼女の頭をぽんぽんと叩いた。

「気に入ってくれたようだな。では、行くでしょう」

そんなモモンの”優しさ”にイビルアイは安堵しながらも、彼に対

する後ろめたさを募らせた。

その後も見廻りは誰に声を掛けられる事もなく続いていた。旧スラム街が近づくにつれて徐々に人通りが少なくなっていき、いつしか周囲には自分たちの声のみが響いていた。

「ほう、イビルアイは新しい魔法を産み出す研究をしているのか。それは興味深いな」

「それが……ほとんどがゴミのような魔法で、実用的な魔法はなかなか作り出せないのだ。優秀な魔法詠唱者が居ればもう少し捗るのだろうか……そういえば、ナーベさんはどこに行っただの？」

「——ああ、ナーベは帝国方面で情報を集めている。〈伝言〉で定期的な連絡を取り合っているが……ナーベを助手に欲しいか？」

「いやいや！ そんなつもりで訊いたのではないぞ。それに、彼女の實力ならば私の方が助手になりかねん」

イビルアイはそんな他愛もない会話が好きだった。だが、この時間はあつという間に過ぎてしまう。彼と共に旅が出来たら最高だろう。場所はどこでもいい。トブの大森林でも、アゼルリシア山脈の最高峰だろうと。砂漠は暑くて苦手だが、モモンが望むなら喜んで向かうつもりだ。

——それが叶わないことは理解している。自分は『蒼の薔薇』の一員であり、モモンは魔導王を監視するためにこの街に居るのだから。そんな辺境の地へ魔導国の冒険者は未知を既知とするために冒険の旅に出ているという話を聞いた。いや、本来冒険者はそういうものだったはずだ。王国の冒険者は『傭兵』と変わらないのだ。こればかりは魔導王が正しいと言わざるを得ない。

イビルアイはかつて十三英雄と呼ばれた者たちとの『冒険』に思いを馳せた。

「そうだ。モモンは“神人”という言葉に聞き覚えはないか？」

その問いを口にしたのは、十三英雄のリーダーの姿がモモンに重なったからだ。

「……“神人”とは、どういう存在なのかな？」

「そうか、知らないか」

六大神とは異なる系譜が思い浮かんだが記憶の片隅に追いやり、イビルアイは語りはじめた。

「……ふれいやー」なる存在、いや、六大神の子孫の中で強大な力に目覚めた者を法国ではそのように呼ぶと聞く。モモンの力を見てその神人に違いないと考えていたのだが——」

突然、モモンが立ち止まる。どうしたのかとイビルアイはモモンを振り返った瞬間——背筋を寒気が襲った。

兜に隠された表情を窺い知ることには出来ない。だが、強い感情を秘めているのは間違いないと感じた。

困惑するイビルアイの様子に気付いたかのように、モモンが声を和らげて語りかけてくる。

「……残念ながら私は“神人”ではない。だが、会ってみたいものだな。その“ふれいやー”や“神人”とやらに」

普段通りのモモンの口調にイビルアイは安堵する。

（そうか、未知の強者の存在を知って昂っていたのだな。強者は惹かれ合う運命……なのかもしれない。私とモモンのように……）

そう納得すると話を続けた。

「私の知る限りで現存するふれいやーはいないな。かつて十三英雄のリーダーがふれいやーを名乗った——そうだが、二百年以上前に死んだ——らしい。」

神人は……すまぬ、知らないのだ。だが、神人という呼び名は法国から伝わってきたもの。法国に居る可能性は考えられるな」

話を静かに聞いていたモモンは頷くと空を見上げた。

「世界は広い。ふれいやーとやらが現れたのはこの辺りだけではない。そうだな……いつかこの地を離れ、彼らを探す旅に出るのも良いかもしれないな。……実は、魔導王には好きにして良いと言われてる。魔導王が私を部下にした理由はこの街を平和的に治めるためだが、既に私がいなくともその目的は果たされているからな」

モモンは南方からこの地に旅してきたという。魔導王がいなければ旅を再開し、今頃は大陸の別の地方を旅していてもおかしくないの

だ。

彼を縛り付けている忌々しい魔導王の存在にこのときばかりは感謝した。それでもいつか、モモンの役目は終わりを迎えるだろう。その時は――

「わ、私も――」

――仲間の姿が脳裏をよぎる。もし、モモンと旅に出たらこの地に二度と戻らないかもしれない。それは『蒼の薔薇』を抜けることを意味していた。仲間がいたからこそ人の街で暮らし、そして、モモンに会おう事が出来た。

「――私もその時までには彼らの情報を集めておこう」

彼女は願った。今の幸せが続くことを。

いつかその時が訪れるまでは。

パンドラズ・アクターは不快だった。

原因はイビルアイから聞いた”神”と”神人”の定義だ。

ナザリツクの守護者たちはアインズより法国に関する情報は既に共有されていた。当然、六大神と神人の存在も。

だが、改めてナザリツク外部の者から聞かされると不快感を隠せなかった。モモンの姿に変化できても心までは変えられないのだ。

イビルアイと別れた後、自らの屋敷に戻るなり溜まっていた不満を口にする。

「――至高の御方々に敵対していた蛮族がこの世界において神を潜称し！ あまつさえ、子孫が”神人”なる称号を与えられているとは、何と嘆かわしい事でしょう！ 神と呼ばれるに相応しいお方は、この地に残られた唯一の至高の御方であるアインズ様において他に居られないでしょう！」

そこで一呼吸おいて振り返った。

「この世界の間違った認識は正すべき――そう思われませんか？ 守護者統括殿」

「――ええ、その通りよ。アインズ様こそこの世界を統べ、神と呼ばれ

るのに相応しい唯一のお方。でも、六大神とやらはもういないようだから、間違った情報の発生源から潰すべきかしら？」

パンドラズ・アクターの屋敷には珍しくアルベドが訪れていた。応接室で彼の帰りを待っていたようだ。

「彼らがこの地に現れたのは六百年前。長い時間を掛けて各地に広まった伝承を無かったことにするのは困難でしょう。それよりは、アインズ様を六大神の上に存在する神と崇めさせる事を提案します」

アルベドは瞬時にパンドラズ・アクターの意図を理解して応える。

「つまり、伝承にアインズ様の事を追加するのね。まずは魔導国以外の戦力を使ってスレイン法国を占領し、その後アインズ様に奴らを救って頂く——」

「さすがは守護者統括殿、ご理解頂けたようですね。ただ、未知の^{ワールド}世界級アイテムや神人の存在は警戒すべきです。投入すべき戦力についてはアインズ様にご相談させて頂きましよう」

話し終わるとパンドラズ・アクターはアルベドに向き直り、胸に手を当て腰を曲げる——創造主にそうあれと定義された仰々しい振る舞いだ。

他のナザリツクの者に配慮して、アインズ以外の者には普段通りの自分を演じているのだ。

——と、その時、アルベドの口から全く予想もしていなかった質問が投げ掛けられる。

「ひとつ聞きたいのだけれど……イビルアイという者はあなたにとってどんな存在かしら？　今までそれについては何も報告が無いようだけど」

「……彼女は人間にしては博識で貴重な情報源であります。まだまだ情報を持っていると思われまますので、継続して親密に接するべきと判断しております」

ドッペルゲンガーであるパンドラズ・アクターに表情は無い。だが、アルベドは彼の真意を覗き込むかのように、動かない彼の表情を黙って見つめている。

——待っているのだ。質問の本当の答えを。

彼は失敗した事に気付いた。質問の意図を理解した上で誤魔化してしまったのだ。

相手はナザリック最上級の知患者。アルベド相手に誤魔化しきれぬ訳がない。こんな質問をするアルベドの真意は読めないが、最善と思われる答えを導きだすと、腰は曲げたまま顔だけを上げて応える。「疑っておられるのでしょうか!? 情などございませぬ!」有害である」と判断した時点で全ての情報を引きずり出した上で始末致しますとも。この事はアインズ様もご存知です」

……反応を窺うが、彼女がその答えに満足したのかは分からなかった。すると、アルベドは冷たい微笑を浮かべ、強い光を放つ黄金の瞳をパンドラズ・アクターに向けてくる。

「私は別にナザリック外部の者に情を移すな、とは言わないわ。アインズ様の利益になるのであれば、ね」

パンドラズ・アクターはアルベドを直視せず、顔を下げて床を見つめたまま押し黙っていた。

アルベドの優しい声に心を見透かされているような感覚に陥ったからだ。……あの時のセバスもこんな感覚だったのだろうか、と思いつき返す。

「それと……あなたに忠告しておいた方が良いと思ったの。もしそいつらが王国の計画を邪魔するのなら容赦なく消すから」

王都リ・エステイゼ。

モモンと別れた後、転移の魔法で拠点である宿屋に戻ったイビルアイはガガーランと丸テーブルを囲んでいた。

「じゃあ、言っただけなのかよ? 今の王国の状況をよ」

「ああ、モモンには大切な役割がある。要らぬ心配を掛ける必要もあるまい。それに……これは国の問題だぞ。冒険者が関与するものでもない」

「……ん? モモン様、じゃあねえのか? あのイビルアイがよくここまでできたもんだ!」

ガガーランが豪快に笑いながらイビルアイの背中を叩こうとするが、片手を挙げて受け止める。

……仮面の奥ではニヤニヤしていたのだが、ガガーランに気付かれないように普段どおりの声で返した。

「ふふん。もはや恋人同士と言っても過言ではあるまい」

言いながら左手の薬指に嵌められた指輪をガガーランに見えるように差し出す。

「いや、そこまでは言っておいてねえけどよ……って、おいおい……まさかその指輪は」

「お前に言っておく。男は数ではない——質だ」

自信をもって言い放ったその言葉に一瞬怯んだ様子を見せたガガーランだったが、訝し気な表情でイビルアイに問い返してきた。

「モモンさんってイビルアイの素顔も見てねえんだろ？ ……まあ、あの人なら大丈夫か。はあー、イビルアイでも乙女してるってのに、浮いた話も出来ねえとは情けねえ。それというのも近頃の男どもは湿気た奴ばかりですよ……最近のし上がって来た貴族どもの噂、知ってるか？」

イビルアイが答える——よりも早く、後ろから近付いてきた人物がそれに答えた。

「その貴族どもの新興派閥が王に退位を迫ってるって噂なら事実よ」

外から来たばかりで冷たい外気を身に漂せているラクユースが席に着くと、ガガーランが明るい声で話しかけた。

「よお、リーダー。ティアとティナはどうしたんだ？ また王女様のお守りか？」

「気になることがあって、調査に行ってもらっているわ。まだ断定はできないけれど……八本指かもしれない」

最後は小さな声で標的の名前を口にした。どこに彼らの手の者が潜んでいるか分からない。

「またあいつらかよ。ヤルダバオトの時にあんなだけ被害にあったってのに……ゴキブリ並みにしぶとい奴らだな」

「それはこの国の貴族どもにも言えることだな。で、奴らは何をやら

かしたのだ？」

「……最近、食糧庫が襲撃される事件が多発している事は知ってるかしら。食糧不足で地方から流れ込んだ一般の民によるものが大部分だけれど、それを煽動する者たちがいるらしいの」

先の戦争により多くの働き手を失った王国は、その影響で地方では食糧不足による餓死者が続出し都市部でも深刻化していた。

正直、イビルアイにはどうでも良いことだった。黙って死を待つ者は愚かだ。生き残りたければ食糧を奪えば良い。剣力、魔力、知力、魅力、権力……それらの「力」が強いものが生き残り、「力」を持たない弱者から死ぬ。それがイビルアイの持論だ。

「それが八本指だと？ 事実だとしても、弱いものたちに生きる術を教えているだけではないか？ それだけなら問題なكارう」

それを聞いたラクユースは苦笑の表情で応える。

「……ラナーにも同じ事を言われたわ。でも、八本指にどんな思惑があるか分からない以上、それを調べるのが先決だと思うの」

「それは依頼なのか？ タダ働きはごめんだぞ」

「ティアとティナが既に調査に向かっているわ……結果を聞いてからどうするか決めましょう」

「……では二人の帰りを待つとしよう」

イビルアイの返答を聞いて、ラクユースは言い難そうに次の話題を告げた。

「まだ終わりじゃないわ。八本指と関連しているか分からないけど、さつき話した貴族の派閥の領地には食糧不足が起きてないみたいなの……噂では魔導国からの支援を受けているとか」

「ふん。国相手ではますます我々の出る幕ではないな——だが、魔導国の動向を外部から調べてモモンに伝えておく事は有益だな」

それを聞いたラクユースは微笑むと重苦しい場の雰囲気が一気に和んでいく。

「あら？ 遂に呼び捨てになったのね！」

「またその話か……」

イビルアイはうんざりした声を挙げるが——仮面の奥では、やはり

笑みが零れていた。

王国の吸血姫3

ナザリック地下大墳墓九階層——アインズの執務室にて、アルベドはシャドウ・デーモンからの報告を受けていた。

「もう一体シャドウ・デーモンを呼んできなさい。あなたはそのまま彼女の所へ戻り『行かせなさい』、と伝えるように」

シャドウ・デーモンは頭を下げると、そのまま影に潜り込み姿を消した。

部屋に一人残されたアルベドは王国で進行中の計画について思い返していた。

計画が成功すれば魔導国が王国を支配することになるが、アルベドは領土拡大以上のメリットを感じていなかった。何しろ残されるものは疲弊した経済、領土、領民……支配後には彼女の仕事が増えることは間違いないだろう。全ては愛しい主のためと想えばこそ身を粉にして働くこともできる。

それにしても、王国を支配している下等生物は周辺国家の中でも最もクズだ。主人の示した方針が無ければ間違いなく踏み潰していただろう——いや、今からでも踏み潰した方が良いのでは……。

だが、アルベドは思い浮かんだ欲求を否定する。肯定すれば今までの苦労は全て無駄となるため、それだけは避けたかった。特にあの事——使者として王国を訪れたときに最も愚かなクズに肩を抱かれた事——を思い出す度に全身を襲う不快感に身を震わせた。

計画の最終段階、魔導国が侵攻を開始するまでは後僅かだが……周辺国家の下等生物の中でも更に力も脳も無いクズどもが支配する国ごとき、ここまで来るのに随分時間を取られてしまった。だが、自らの考えでも最善と考える計画だから仕方がない。

だからこそ、王国を上回る国力を保有する帝国を消耗なく、しかも驚くほど短い期間で属国化した主人の智謀には感嘆の念を抱かずにはいられない。

(アインズ様と比べれば、我らの知恵も下等生物どもと大した違いはないのかもしれないわね……)

愛しい主人の姿を思い浮かべてアルベドは落ち着きを取り戻すと再び思考する。

計画が成功することで得られる最大のメリットは、優秀な知恵を持つ部下が加わることもかもしれない。だが、報告を受けた内容に彼が食いつけば、アルベドにとつてそれこそが最大のメリットになる可能性が高い。

アルベドは笑みを浮かべて呟いた。

「——さて、この情報をパンドラズ・アクターに教えてあげないと」

日はそれほど高くないが、もう正午に近い時間だろう。イビルアイたち『蒼の薔薇』は王都貧民街の一角にある二階建てのそれほど大きくない屋敷を路地裏から窺っていた。

昨夜偵察から戻ったティアの報告によると、食糧庫を襲っていた平民たちの中に明らかに武装の異なる者が混ざっていたという。後をつけたところ——何度も偽のアジトを経由した後——ここに入っていくのを確認したようだ。

だが、その後が問題だった。

『依頼を受けていない冒険者が他人の所有する家屋へ侵入すること、人を襲うことも犯罪だ。役人に任せておくべきだ』と主張するイビルアイと、『役人に任せては握りつぶされる。八本指の目的は掴んでおきたい』と主張するラクユースの意見で真っ向から対立したのだ。

ティア、ティナも無報酬は問題だとイビルアイ寄りの意見で、ガーランはどちらの主張も理解できると中立を保った。

多数決であればラクユースの意見は黙殺されたであろう。だが、『蒼の薔薇』では全員が納得するまで話を続ける。

結局、もう一度ラナーにどうするかを確認することでこの場は納まった。昨晚の話ではラナーも乗り気ではないように受け取れたので静観する事になると考えていたのだが——翌朝ラナーのもとへ

行ったラキユースが宿に戻ってくるなり皆を呼び出した。

「ラナーからの正式な依頼よ。奴らを食糧庫襲撃の主犯として捕縛してほしいって。冒険者ギルドは通してないけど……どうかしら？」

ガガーラン、ティア、ティナは顔を見合わせて互いの表情を確認する。皆、眼には強い意志を感じさせる光が宿っていた。イビルアイも同じ表情——仮面で隠しているが——を浮かべて頷いた。

屋敷にいる者たちの情報共有は済んでいる。先ほどイビルアイが不可視化して屋敷内の様子をざっと見たところ、確認できたのが門の内側に二人、建物の一階に十人程。冒険者で言えば多めに見ても銀級くらいの者ばかりで彼女たちが後れを取ることは無さそうだが、屋敷の中にはまだ確認できていない者がいる可能性がある。

屋敷の様子を窺いながらラキユースがこれからの行動の説明を始める。

「ティアとティナは塀を越えて門番二人を無力化してから門を開けてくれるかしら。その後、私とガガーランも正面から屋敷に突入、イビルアイは上空で待機。逃亡する者を逃がさないで」

全員は頷くと配置につき、ティアとティナの突入を待った。

——暫くして音も無く門が開くと内側には門番と思しき二人の男が倒れていた。今回の任務は捕縛であるため、恐らく即効性の麻痺毒を使って動けなくしているのだろう。

中庭や建物の様子を窺うが、敵が現れる気配は無い。まだ気づかれていないようだ。

ラキユースは屋敷の屋根の上にいるイビルアイに合図を送ると、屋敷の扉前に素早く移動する。

ガガーランが両開き式の扉を静かに引くと鍵は掛かっていなかったらしく、すんなり開いた。

「っ！ 誰だ、てめえら!？」

扉の奥には武装していない男が一人、扉を開けて中に入る彼女たちを見つけて大声を上げた。

「ティアとティナは奥をお願い」

二人は頷くと音もたてずに素早い動きで奥の部屋へ入っていく。ガガーランは声を挙げた男と間合いを詰めて右拳を振り上げる。

「おらっ！」

拳を男の顔面にぶち込むと男の身体は宙を舞い、後ろの壁に叩き付けられて動かなくなった。運が悪ければ死んだかもしれないが、気にしている時間は無い。先行したティアとティナを追いかけるようにラクユースとガガーランも奥の部屋に入る。

部屋の中は広間になっていて男たちはここで食事を摂っていたようだ。イビルアイが確認した通り、玄関に居た男を含めて十人の男たちがここにいた。つまり、これで全部のはずだ。

『蒼の薔薇』よ。あなたたちには食糧庫襲撃の主犯として捕縛命令が出ているわ。怪我をしたくなければ無駄な抵抗は止めなさい」

男たちを見れば、既に半数以上の者がティアとティナにより無力化されていた。正直二人だけで十分だったか——と、考えたとき男の一人が下に向かって叫んだ。

「敵襲です！ お願いします!!」

その叫びに応えるかのように、何かが石造りの床を通り抜けてきた。やがて、その透けるような全身が姿を現すと実体化する。

眼に入るのは蒼い馬——そして、その馬上には禍々しい全身鎧を身に纏う騎士。

現れたのは空席となっていた八本指の奴隷部門の長と警備の長、そこに正式に就任したアンデッドの一人——蒼褪めた乗り手——であつた。

全身を襲う震えが止まらない。血がさあーつと引く感覚……この怖気には覚えがある。——そうだ、魔導王の屋敷の門番だ。あれを見たときに感じた感覚に近かった。ラクユースはあの時のイビルアイの言葉を思いだしていた。

——「魔神を確実に超える存在」「あれには勝てない」と。

なぜ、八本指がこれほどの存在を？ なぜ、こんな街中に？ なぜ、

自分たちはこれ程の脅威と対峙しているのか？ ……いくつもの疑問が浮かんでくるが何一つ答えを導き出すことはできなかった。

蒼褪めた乗り手の後ろでは男たちが勝ち誇ったかのように笑みを浮かべている。しかし、次元を超えた存在に殺気を向けられている彼女たちに、男たちを気にする余裕などある筈がない。

——動けば、死ぬ。

ガガーラン、ティア、ティナも同様に全く動けない。同格以上と思しき存在——ヤルダバオトと対峙した経験はあるが、あの時は涼し気な様子で殺気を向けられてはいなかった。

だが、今は違う。かつて経験したことのない程の殺気を向けられて彼女たちは自らの命を諦めかけていた。

その時——。

窓を突き破り、一本の水晶の槍が蒼褪めた乗り手めがけて降り注いだ。

「逃げるぞ!! 私が引き付ける、早く脱出しろ!!」

イビルアイの呼ぶ声に正気を取り戻したのか、ラキユース達は後方の扉に向かって撤退を始めた。

「イビルアイ! あなたは!?!」

「私のことは気にするな! 大丈夫だ、少しは持ち堪えられる」

非実体化することでイビルアイの〈水晶騎士槍〉を難なく避けたアンデッドは、飛行しているイビルアイめがけて突進していった。

「宙を駆けるか…その上、非実体化するとなると移動阻害の類は使えない。やむを得まい、〈水晶防壁〉」

イビルアイの前方に水晶の壁が現れる。そこにアンデッドの槍が突き入れられると壁の中心にひびが入り一撃で破壊された。だが、イビルアイはその隙に準備していた魔法を発動する。

(一撃か…だが、想定内だ!)

「〈結晶散弾〉」

小さな水晶の散弾が攻撃したばかりで体勢が乱れているアンデッドを襲う。しかし、アンデッドは盾を構えて全て弾き返してい

た。盾には傷らしきものが全くついていない。

「ちっ！」

イビルアイは〈飛行〉^{フライ}で距離をとろうとするが、アンデッドの接近の方が早い。イビルアイは一撃喰らう覚悟を決めた。

「灼けつく光」^{シアリング・ライト}

その時、ラキユースの掌から収束された光が放たれる。この攻撃を予測できなかったのか、アンデッドの背中に直撃する。

「――」

アンデッドは呻き声も出さないが、背中からは白い煙が上がっている。さすがに神聖属性の魔法は効いたようだが、致命傷には程遠いだろう。初めてダメージを負ったアンデッドは、憤激したかのようにラキユースに向きを変えて上空から襲い掛かった。

（まずい！）

ラキユースでは一撃も耐えられない。そして、王国には彼女を生き返らせられる者がいない。絶望の予感に急いで距離を詰めるが、無情にもアンデッドはラキユースの胸元めがけて槍を突き出した――瞬間、ラキユースの身体がふっと消えた。

「よくやったぞ、ティアー！」

ラキユースがティアーの後ろに移動したのを確認して、アンデッドの無防備な背中に魔法を放つ。

「魔法最強化・結晶散弾」^{マキシマイズマジックシヤード・バツクシヨット}

硬質な物体が幾重にもぶつかり合う凄まじい轟音が部屋中に響き渡り、アンデッドは体勢を崩した。アンデッドは怒りを滾らせたかのように顔をイビルアイに向けてくる。

（これでもダメか。勝てはしないが……時間は稼げる！）

その時、部屋を出ていたガガーランとティナが部屋の中に戻ってきた。

「何をしている！ 早く逃げろ！」

イビルアイは二人を叱咤するように叫ぶが、続く光景を見てさすがの彼女も表情を変えた。

「――二体、いたのか……」

ガガーランとティナを部屋の中に追い込むように、後からもう一体の蒼褪めた乗り手が入ってきた。

——終わりだ。もはや仲間を逃がすこともできない。自分だけなら転移で逃げられるかもしれないが、仲間を見捨てて逃げられる筈もない。

(最後まで足掻いてやろう。黙って死ぬなど、このイビルアイには似合わない！)

防御魔法を掛けようとした、その時、イビルアイはこの場では有り得ない声を聴いた。

「——待て」

「モモン……どうしてここに……」

二体目の蒼褪めた乗り手の後ろにモモンが現れたのだ。イビルアイは嬉しさと驚愕で頭が埋め尽くされて何も考えられなかった。

「話は後だ。撤退しろ」

「そ、そいつは困るな、『漆黒』の英雄モモンさんよ。生かして帰したら俺たちが——」

部屋の隅に固まった男たちが引きつった表情を浮かべて、びくびくしながらモモンに不満をぶつけてくる。

「——無用な心配だ。お前たちの上司には話を通してある……お前たちが責任を問われることは無い。それにそいつらも私と戦う気は無さそうだよ」

蒼褪めた乗り手を見れば、身に包んだ殺気は消え失せ直立不動の姿勢で動きを止めていた。

『蒼の薔薇』はモモンを伴い拠点である宿に戻っていた。幸いにも

誰も怪我は無かったが、彼女たちの表情は一樣に困惑気であった。

皆が席に着くと、モモンから語り始めた。

「いろいろ聞きたいことはあると思いますが、順を追って話しましょう。まずは私がここに来た理由ですが……勿論、あなた方を救うためです」

ラクキュースが我慢しきれずに声を上げる。

「なぜ、分かったのですか？ 我々の危機をどのように知られたのでしょうか？」

モモンが考える素振りを見せるが——やがて彼女たち全員を眺めて答えた。

「魔導王の部下からの情報です。あなた方に危機が迫っている、と」「そんなバカな……早すぎるだろ」

ガガーランは呟くと、信じられないといった表情でモモンを見つめている。

「あなた方が敷地内に入った時点で知られていたのでしょうか。……今後、彼らの邪魔はしないという条件でここへ転移してもらいました。そして、あなた方が戦った彼らは八本指の配下ですが——八本指は既に魔導国の配下となっています」

「そんな……」

ラクキュースの顔色が蒼褪めていく。いや、ラクキュースだけではなくガガーランも同様だった。

だが、イビルアイはモモンに詰め寄った。

「モモンは、それを聞いてどう思ったのだ？ 魔導国は……敵ではなかったのか？」

モモンはイビルアイに向き直る。兜の奥の表情は窺い知ることにはできないが、イビルアイは責められているような感覚に陥った。

「勘違いするな、私は弱き者の味方だ。弱き民衆が無法な虐待を受けたいれば、相手が如何なる存在であってもこの剣を抜き戦おう」

「では……八本指は悪です。民衆を苦しめて富を巻き上げていました」

ラクキュースの答えを受けてモモンは強い口調で語る。

「貴族とグルになって、だろう。王国がそれを許容していたのであれば王国も同罪だ。しかし、今の八本指に私が剣を向ける理由は無い

な。……大事なことは民衆にとって何が善で何が悪かだけだ」

モモンは王国の現状を知っていた。もしかしたら彼女たちの誰よりも詳しいかもしれない。そして、イビルアイの考え方とは異なっていた。彼は弱者を救うためならば国が相手でも関係ないという。

いつしか、モモンが敬語を使わなくなったことに誰も違和感を感じていなかった。それ以上にモモンの言葉が胸に刺さっていた。

「それじゃ、魔導国の工作を見過ごせって言うのか？」

ガガーランが食い下がる。正義感の強い彼女は、今までの八本指の所業にメンバーの中で最も憤りを感じていたのだ。

「止める理由は無いな。魔導国は助けを求める王国貴族に対して食糧を援助していると聞いた。だが、それでも足りないのだろう。お前たちが弱者の立場ならどうする？ ——はつきり言おう。今、私が剣を向けるとしたら、それは魔導国ではなく王国だ。魔導国——いや、魔導王が何を目的としているのかは私の知るところでは無い。だが、明日死ぬ命を救っているのは魔導王だ」

そもそも魔導王が王国の働き手を……それを言うのは間違いだとも誰かが理解している。今の王国の惨状は、王国がゆつくりと腐敗していった事こそが根本原因に違いなかった。

「民あつての国だ。民が今の国を望んでいないのであれば——民が望む国を創れば良い」

翌日、モモンの館の応接間ではアルベドとパンドラズ・アクターの話し合いが行われていた。

「情報を提供いただいたこと、感謝の念に堪えません。……しかし、なぜこんな手の込んだことを？ あなたなら『蒼の薔薇』が来る前に拠点を別の場所に移すこともできたのではありませんか？」

パンドラズ・アクターの間にアルベドは微笑みながら応える。

「王国の計画はアインズ様より私とデミウルゴスに任されているけれど、これもアインズ様のご計画のひとつには違いありません……あなたはそ

れを理解しているわね？」

アルベドはパンドラズ・アクターが頷くのを満足そうに眺めると言葉が続けた。

「私は確認しておきたかったの……あなたがアインズ様の思惑を超えてメリットを提示できるような行動できるのかを。あなたはあれらを救う事でアインズ様の計画が達成されること以上の成果を期待したのでしょうか？——当然よね、あなたはアインズ様にとって”特別な存在だもの”

「おお！ なぜその事を！ 仰る通り、私は父上に特別と認められた存在。より大きな成果をださねばなりません！」

アルベドはアインズとパンドラズ・アクターの秘密を知っていた訳ではない。自らの主人に創造された唯一の存在という意味で”特別”と言ったのだが……。

”特別”を肯定する返答を聞いて、アルベドの胸の内では嫉妬という名の黒い塊が湧き上がっていたが、表情には出さずに話を続ける。パンドラズ・アクターは普段の言動では想像できないが、自らに匹敵する程の知恵者でもある。余計な猜疑心を生まないよう注意しなければならぬ。

「私もできる限りあなたに協力するつもりよ。あなたの成長とアインズ様のお考え以上の成果を提示すれば、より喜ばれるに違いないわ」
「感謝いたします、守護者統括殿……。それと『蒼の薔薇』ですが、彼女たちは計画の一端を知ってしまいました。影響ないとは思いますが……」

「メリットがあるからわざわざ助けたのでしょうか？ 事実を知ったところで彼女たちには何も出来ないでしょう。計画に支障が無ければ危害を加えたりはしないわ。それとも——本当に情が移ったのかしら？」

「——正直に申し上げますと、彼女に懐かれるのは悪くない気分です。ナザリツクの者たちと一緒にいるような親近感といいますか……。いい加減、仮面は外して欲しいところですね。ただ、彼女は『モモン』に想いを寄せているので、いつかアインズ様に引き継ぐ事になっても

困らないようにしておくつもりです」

頭を下げるパンドラズ・アクターに普段の仰々しい振る舞いは見えなかった。これが本来の彼なのだろう。

アルベドは満足げに頷くと、満面の笑顔を浮かべてパンドラズ・アクターに告げる。

「『守護者統括』という呼び名では固いから」アルベド」と呼び捨てにして欲しいわ。それより、もう少し先の話になるのだけれど……あなた副官を勤めることになる私のチーム。その方針についてあなたの意見を聞いておきたいわね」

王国の吸血姫 4

モモンが去った後、蒼の薔薇は王城にあるラナーの私室を訪れていた。

ラナーからの依頼——食糧庫襲撃犯の捕縛——に失敗した事を依頼主に報告するためだ。

依頼の失敗、それは別段珍しい事ではない。想定外の事態に対処が困難な駆け出しの銅や鉄級であれば頻繁に起こりうる事であるのだが、蒼の薔薇はアダマンタイト級——人類最高峰の冒険者である。つまり、蒼の薔薇が失敗したという事は人類では誰も無し得ないという事実に直結する。

一歩間違えれば大混乱の事態に発展したであろうが、幸いなことに今回の依頼は冒険者組合を通さなかったため、彼らが事実を闇に葬る必要は無かった。

だが、そんな些細なことは彼女たちの頭から抜け落ちていた。いま彼女たち——イビルアイを除く——にあるのは王国の存亡に関わる事実を伝えなくてはならない、という使命感であった。

『民が望む国を創れば良い』、ですか……。王族の一人としては耳が痛い話ですね」

ラキュースが事の経緯を話し終わると、ラナーは困ったような笑顔を浮かべながら心情を吐露した。

そんなラナーの表情を見つめながら、気まずそうにラキュースは尋ねる。

「この事実を……公表する？」

冒険者の道を選択したとはいえ、貴族の肩書も持つラキュースにとって王国の行く末は気掛かりだろう。

だが、イビルアイはそんな事に気を配る余裕は無かった。胸に抱く想いはただひとつ。

——モモンと気まずい別れ方をしてしまったこと。

八本指と魔導国の繋がりをモモンの口から説明されるといふ全く想定外の状況に流されたとはいえ、結果的には皆でモモンを問い詰め

てしまった。対するモモンの反応は普段の優しげな口調ではなく、まるで聞き分けの無い幼子たちを諭すような強い口調だった。思い起こせば、絶体絶命の危機を救ってくれたモモンに礼の言葉すら伝えていない事実には愕然とする。

……怒っているだろうか。

考える程、慚愧の念に胸がぎゅつと締め付けられる。

こんな時すら涙を流せない己の身体が忌々しい。

そんなイビルアイの想いを余所に、会話は続いていた。

「——公表はしません。したところで対処できないのですから」

薄々は予想していた答えに蒼の薔薇の面々は頷くが、心の片隅でラナーならば、という想いがあつたため僅かに表情を曇らせる。

「それよりも……」

ラナーにしては珍しく言葉を詰まらせる。

何かを考えているのだろう。視線を下げて床の一点を見つめていたが、やがて独り言を呟くようにひとつの疑問を口にする。

「……なぜ、魔導王の部下はわざわざモモン様に情報を流したのでしょうか」

「決まっている！ モモンに恩を売るためだ！ それしかあるまい！」

モモンの名を出されてイビルアイは即座に食い付く。

実際それしか考えられなかった。如何に強大な力を持つ魔導王でも、モモンの力は脅威なのだろう。

「……そうですね。それしかありませんよね。……ひとつ確認したいのですが、皆様とモモン様の間で最近何か変わったことはありませんでしたか？」

イビルアイを除く蒼の薔薇の面々は一斉にイビルアイに視線を集めると、ティナが代表して応える。

「イビルアイがモモンさんと連絡を取り合うようになった。まさに通い妻」

ラナーの瞳の色が変化したように見えた——のも一瞬、華のような

笑顔を浮かべた普段の彼女に戻る。

「まあ！ それは、おめでとうございます」

「ふん。嫌味か？ それも今回の件で全てパーだ。助けても礼の一つも返さない、礼儀知らずな我らに愛想を尽かしたに違いない」

イビルアイの言葉に、彼女を除く全員が申し訳なさげな表情を浮かべる。皆、その事実気づいていたが、うまく言い出せるタイミングが無かったからだ。

そんな彼女たちの表情を窺っていたラナーは落ち着いた声で告げる。

「モモン様はその程度の事で腹を立てるような器の小さなお方ではないと、お見受けしています。いずれにせよ、もう一度お会いして直接お礼を申し上げるべきですね」

「……そうね。イビルアイ、モモンさんの所へは全員で行きましょう」
ラキュースの言葉に全員は神妙な顔で頷いた。

その後も今回の件の対策について話し合いは続いたが、積極的な解決策が出ないため解散となった。

蒼の薔薇が去ってから部屋に残されたラナーは拭いきれなかった疑問について思考する。

（蒼の薔薇が計画の邪魔になるから始末するための命令と考えていたけれど……蒼の薔薇は生きて戻り、それを救ったのはモモンさんだった。アルベド様とモモンさんはナザリックの同志のはず。なぜこのような茶番を？ アルベド様はモモンさんに蒼の薔薇たちを救う理由があるのを知って、それを理由に計画に関わらせるよう動いた……違うわね。純粹に協力関係を築きたかった、というのが一番納得がいくかしら。魔導国も一枚岩ではない？ ……いえ、少なくともアルベド様には魔導国とは別の思惑があるようね）

アルベドの思惑まではさすがに考えが及ばないが、導き出した答えに納得する。ふと、鏡に映る自分の姿を見ると濁った瞳に歪んだ笑みをしていることに気づいた。

（これ以上考えるとアルベド様やデミウルゴス様に気づかれてしまう

わね……でも、ああ……早く彼の地で偉大な方々とお話ししてみたいわ。其のためにも、今は計画通り事を進めるとしましょう」

——数日後、エ・ランテルに到着した蒼の薔薇は、真つ先にモモンの邸宅を目指した。

門番に用件を告げると、モモンは外出していないとのことと、驚いたことにモモンは屋敷で待っているという。

イビルアイも中庭から先に進むのは初めてだ。若干緊張しながら、彼女たちは固まって中庭を歩いていく。

中庭から少し離れたところに見える厩舎らしき建物の前には、十人ほどの亜人たちに混ざって魔獣とアンデッドの姿が見えた。あの魔獣がモモンの騎獣——ハムスケなのだろう。亜人の方は恐らく^{リザードマン}蜥蜴人に……トロールもいる。彼らは戦闘訓練中のようで、今は二体^{リザードマン}の蜥蜴人の一騎打ちを他の者が囲んで観戦しているようだ。

この様子だけでも多くの種族がこの街で暮らしていることが窺えた。

やがてモモンの屋敷に到着すると、イビルアイは扉を押し開き中に入る。無礼かもしれないが、モモンの屋敷には使用人が居ないことを本人から聞いていたからだ。

奥に進むと——応接間らしき場所で長椅子に腰掛ける全身鎧のモモンの姿が目に入った。

座ったままモモンはイビルアイ達に声を掛ける。

「——よく来たな。何もないところだが歓迎しよう」

モモンに促されて皆、緊張した面持ちで対面の長椅子に座っている。イビルアイも逸る気持ちを抑えてそれに続いた。

ラキュースが皆の顔を眺めて彼女たちが頷くの見るとモモンに向き直って一斉に頭を下げた。

「危ないところを助けて頂き、本当にありがとうございます。あの

場での無礼をお許しください」

モモンは肩を竦める。

「些細な事だ、気にする必要は無い。それよりも皆、無事で何よりだ」
モモンのその言葉を聞いてラキユース達は安堵の表情を浮かべた。

——だが、イビルアイはこれで終わらせるつもりは無かった。王都
を出る前から決めていたことを実行する。

右手の薬指に着けていた指輪を外し、仮面に手を掛けゆつくりと
……外した。

素顔——白い肌、赤い目、唇から僅かに犬歯——をモモンの前に晒
した。

「モモン、今まで黙っていて本当に済まなかった。見ての通り、私はア
ンデッド——かつては『国墮とし』と呼ばれた吸血鬼^{ヴァンパイア}だ」

イビルアイは必死だった。今まで隠していた事実、そして今回の無
礼に対してモモンに応えるために。

モモンの様子を窺うが、やはり兜に覆われた表情を見ることは出来
ない。

するとイビルアイの想いに気づいたのか、今度はモモンが自らの兜
に手を掛けて脱いだ。

「仮面を外した相手に対して兜を被ったままでは私の方こそ無礼だ
な。……別に私は隠している訳ではないのだがな」

兜を外した素顔は黒髪で細目で——そして、英雄と呼ばれるに相応
しい優しい気な顔立ちだった。ヤルダバオトの件で王城で見たときと
寸分変わらない素顔だ。

とはいえ、間近で直視することは初めてであるため、イビルアイは
自らの胸が高鳴るような感覚に襲われて咄嗟に胸を押さえた。勿論、
心臓は動いていない。だが、この想いは本物だと確信していた。

「……驚いては、いないのですね」

「ああ、以前からそうではないかと考えていた。——第五位階の魔法
に高い身体能力を持つ幼い少女が唯の人間では少々無理がある。し
かし、『国墮とし』か……だから十三英雄の事も知っていたのだな」

そこからはイビルアイの独擅場だった。今までの想いをぶちまけ

るように『国墮とし』となった経緯から十三英雄との冒険、今に至るまでの話が目を跨いでも続いた。

長時間の話にも拘らず、モモンは疲れた様子も見せず、時に笑顔で、時に驚いた表情を見せながらイビルアイの話に真剣に耳を傾けていた——二人を除く者は夜も更けた頃、一旦外で宿を取り、明日出直すと言つて屋敷を出ていった。

翌日の日も高く上った頃、再びラキユース達がモモンの屋敷を訪れていた。

イビルアイはやり切ったような清々しい表情でモモンと談笑していたが、仲間が姿を現すと普段の不敵な様子に戻って声を掛けた。

「遅かったな。まだまだ話し足りないが……私の話すべきことは大体終わったぞ。次はお前たちの番だな」

「あなたが良くてもモモンさんがお疲れでしょう？ モモンさん、長い間彼女の話にお付き合い頂いてありがとうございます」

普段通りのイビルアイと向かい合つて微笑んでいるモモンの様子を見て、ラキユースが苦笑しながらモモンに告げた。

「はっはっは、心配無用だ。私はこの程度で疲れるような鍛え方をしていないのでな」

「やっば、すげえな……モモンさんは」

ガガーランが感嘆の声を上げ、ティアとティナ、イビルアイも首を何度も縦に振る。隣の屋敷には魔導王がいることも忘れたかのようになり、和やかな雰囲気にも包まれていた。

「話は変わるが——」

モモンが真剣な表情で口を開くと場の空気が張り詰めた。

『蒼の薔薇』は魔導王の事をどう考えている」

イビルアイたちは顔を見合わせて、何と答えるべきか判断に迷っていたが……やがてラキユースが口を開く。

「戦争とはいえ、十八万人もの人間を殺す魔法を行使するアンデッド……人の世にあつてはならない存在だと思つていました。ですが——」

「このエ・ランテルにおける多民族を平和的に統治することは、魔導王以外には成し得ないものでしょう。王国への工作も……民を救うという点では納得できます」

「これほどの統治を見せる魔導王は素直に『すげえ』って思うぜ……ここならイビルアイが仮面外して出歩いてても、誰も何とも思わねえだろうしな」

「この民の表情は王国の民と正反対。この統治が続くなら魔導王を認める」

「強大な力を持つ者が平等の支配を行うのはある意味理想。止める者がいないと少し怖いけど」

ガガーラン、ティア、ティナがそれぞれ意見を述べた。モモンが沈黙を守っているイビルアイに顔を向けると、彼女はモモンの眼を見つめて言った。

「モモンは、魔導王を信じたのか？」

彼女たちはモモンを一齐に見ると固唾を飲んで返答を待った。各人に複雑な感情はあるが、結局のところモモン次第ということだ。モモンはイビルアイの眼を見つめて応えた。

「魔導王は善か悪か……その判断は難しい。王国兵やビーストマンのように敵対する者には容赦無く命を奪っている。だが、一方では傘下になる者や救いを求める者には他国の民であろうと慈悲を与えている……あれ程の力があればもっと傲慢に振る舞うものだ」

モモンは一息にそこまで話すと、彼女たちを見まわして続けた。

「――私は魔導王を信じる」

イビルアイはモモンの言葉を聞いて笑顔で応えた。

「モモンがそこまで言うのなら……私も信じよう」

蒼の薔薇が去った後、パンドラス・アクターはアインズの執務室にてイビルアイから得た成果を報告していた。

「素晴らしいぞ！ まさかあの怪しげな仮面の少女がそれほどの情報源だったとはな！ 特に八欲王の空中都市にあるという

ネームレス・スベルブック
無銘なる呪文書の情報だ。新しく生み出された魔法まで自動的に記載されるとは……非常に興味深い、その話を聞く限りでは慎重に対応すべきだな」

「はっ。危険性についてはもう少し詳細に聞く必要があるでしょう」

アインズはパンドラズ・アクターからの報告に上機嫌だった。何しろ今まで手探りだったぶれいやーと世界級アイテム、^{ワールド}竜王の情報が思わぬところで入手できたからだ。

「よくやったぞ、パンドラズ・アクター。褒美として何か望みがあれば言ってみるが良い」

パンドラズ・アクターは自然な振る舞いで頭を下げるとアインズに返答する。

「子として、父上がお悦びになられる事こそが何よりの褒美に御座います。ですが、敢えて申し上げますと——イビルアイ及び蒼の薔薇のメンバーの救済をお願いしたく存じます」

（むっ……そうしたいところだが、エントマにはイビルアイの声を与える約束をしてしまったからなあ。上司として部下との約束を反故にするのは問題だろう）

アインズが悩んでいるとパンドラズ・アクターが続けて言った。

「父上が悩まれているのはエントマ嬢への褒美の件ですね。その件で、アルベドにエントマ嬢を連れてくるようお願いしております」

（アルベドを呼び捨て？ いつからこいつらそんな仲に……いや、子供同士、仲が良いのは喜ばしいことだが）

「それから父上、ちよつとお耳を——」

パンドラズ・アクターはアインズの隣に立つと耳元で囁いた。お付きのメイドに聞こえないように配慮したのだろう。

「——それで良いのか？」

「はっ、父上からお伝え頂ければ」

アインズとしてはエントマを騙しているようで微妙な気分陥ったが……背に腹は代えられないとも言おうし、と深く考えないようにした。

暫くするとドアをノックする音が聞こえる。中に入ることを許可するとメイドが扉を開けて二人が部屋に入ってきた。

「アルベド、ご苦労だった。……エントマよ、わざわざ呼び出して済まないな」

「はっ、アインズ様のお呼びとあれば如何なる時にも馳せ参じます」

エントマは頭を下げたままアインズに返答した。

「まずは面を上げよ。お前を呼び出した理由は……既にアルベドから聞いているのだろうか？」

「はっ！ イビルアイという者の声を頂く件は、謹んで辞退させていただきます」

「そうではない。……いや、そうなのだが……エントマ、今のアルシエという者の声に慣れ親しんでしまったのか、可愛らしいお前には今の声が合っていると、私は考えている。イビルアイの声はハスキーでお前の良い部分を消してしまいそうでな」

エントマの表情は相変わらずだが、両手をばたつかせている様は一目で慌てているのが分かった。

「わ、わたしが可愛いだなんてえ、そんな勿体ないお言葉をお」

こほん、とアルベドが咳払いする。それは大きな咳払いだった。それに反応してエントマの動きがぴたつと静止する。

「——という事でエントマには後日、改めて別の褒美を用意しよう」

「はっ！ 有難きお言葉」

アインズは手を振るとエントマとアルベドに告げる。

「ではアルベド、エントマよ。下がるが良い」

「はっ！」

二人が退出するのを待ってからパンドラズ・アクターが口を——開いたままだが——開く。

「父上、では蒼の薔薇は——」

「感服したぞ、パンドラズ・アクター。この根回しも含めて、な。——蒼の薔薇はアインズ・ウール・ゴウンの名に於いて保護することを約束しよう」

愉快そうに笑う父の姿を見ながら、パンドラズ・アクターは全身で

喜びを感じて父に向かって敬礼していた。

王国の守護者Ⅰ

年が明け、季節はますます厳しい寒さの様相を呈していく頃、寒さに比例するようにリ・エステイーズ王国の各地では貴族や王族に不満を持つ民衆による暴動が頻発していた。

その最中、リ・エステイーズ王国の宮廷内ではある新興の派閥が猛威を奮っていた。

派閥を率いる者の名はフィリップ。無名の下級貴族だ。先の戦争で大貴族たちが命を落としたとはいえ、そのような者が派閥のトップに立つことはまずあり得ない。

勿論、それには裏がある。

フィリップの派閥に属すれば魔導国の支援を受けられたのだ。食糧問題はどの貴族も頭を抱える難題であり、これに飛びつく貴族も少なくなかった。特にエ・ランテルから王都へのルートに領地を持つ貴族は積極的に参加した。魔導国が王国へ侵攻してきた際に領地への被害を考慮してくれることを期待して。他にも王国が滅びた後の事を考えて参加する者もいた。

その派閥は王派閥と対立する貴族派閥に分類されるのだが、敢えてこのように呼ばれた——「魔導国派」と。

一方、魔導国派を快く思わない貴族もいる。その大半がうますぎる話に危険を感じて距離を置く従来の貴族派閥であり、残りが忠誠心を持った王派閥である。

王派閥は魔導国派を王国貴族の誇りを持たない恥知らずと罵るが、表立って非難するような愚かな真似はしない。今や魔導国は帝国、竜王国を従える大国であり、魔導王の不興を買えば王国に未来は無いことを十分理解していたからだ。

それは、王族も同様だった。

渦中のフィリップはというと、第三王女のラナーを娶りたいと王に申し入れていた。この時、王は苦悩しながらも即答を避け、フィリップも強く迫らずに大人しく引き下がったのだが……両者の表情を見れば宮廷内の力関係は誰の目にも明白であった。

だが、転機は突然訪れた。

その日、王の使者から連絡を受けて貴族たちが謁見の間に召集され、フィリップは先日の提案の返事を期待して派閥の貴族たちと共に意気揚々と乗り込んだ。

実のところフィリップには金が無いのだ。確かに派閥トップとして発言力は大きいが実利は無いに等しく、また派閥の貴族たちは魔導国の名の下に集まっているだけで部下では無い。勿論、派閥の貴族に頼めば融通してくれるだろうが、出来れば貸しを作りたくない。

そこでラナー王女との婚姻である。

（王族と婚姻関係を結べば新たな地位と領土を得られるだろう……その後、国王を魔導国の属国に下るよう説得すれば、魔導国内での俺の価値は計り知れないものになる。ゆくゆくはアルベド様との婚姻関係を結び、魔導国内で俺の地位を確立する——我ながら完璧な計画だ）

そう考えると己の未来を思い浮かべて笑いをこらえるのに必死だった。

妄想に浸っている間にも次々と貴族が集まってくる。最後に第二王子ザナックと国王ランポツサ三世が入室し、王が玉座に座ると貴族たちは形式的な礼の姿勢をとる。

このような場では王の挨拶から始まるのが通例だ。しかし、意外にも言葉を発したのはザナックであった。

そして——ザナックは誰もが驚愕する口上を述べた。

「そこにいるフィリップを捕らえよ。罪状は王家への不敬罪だ」

突然フィリップへの捕縛命令を出したのだ。周囲は水を打ったように静まり返った。王は黙して語らず、表情すら変えずに事態を眺めている。呆然と立ち尽くしていたフィリップは周囲の兵士に捕縛されザナックの前に跪かされた。

「……ザナック殿下、理由をお聞かせください」

フィリップは未だ事態を飲み込めていないが、冷静な素振りを装ってザナックに尋ねた。だが、ザナックから返されたのは素っ気ない言

葉だった。

「いま言った通りだが？」

フィリップの鼓動は早鐘を打ちならし顔色が紅潮していく。

——こいつはバカか？

魔導国の支援を受ける自分にこのような仕打ちをすることは魔導国に唾を吐くに等しい行為だ。そんな事も理解できなくなったか？

噴き上がる怒りに身を任せてザナツクを睨みつける。

「正気ですか!？ 私の後ろには彼の国が付いているのですよ!？」

ザナツクはうんざりした表情を隠そうともせず蔑むような目を向けてくる。

「分を弁えろ。お前が間に入らなくとも魔導国との交渉は私がやっていく。それに……ここに魔導国からの書状が届いている」

ザナツクは傍付きの貴族から羊皮紙を受け取ると、その内容を掻い摘んで読み上げた。

「貴国の貴族より、領民を助ける名目で救援を請われたため物資を支援したのは事実。しかし、本国とはそれ以上の関係はない……との事だ。今のお前、いや、お前たちには何の価値もないことが理解できたか？ 今までの宮廷における貴族とは思えぬ無礼の数々……全くもって許し難い。故に貴族位を剥奪の上、投獄する。不敬を行った他の者も同罪だ」

広間が一気にざわついた。貴族たちは隣り合う者と囁きあい、事の始終を見守っていた——フィリップに与していた——貴族たちは身の危険を察知しその場を離れようと動き出していた。

「——お待ちください！ アルベド様に、アルベド様に連絡してください！ このような事をあの方が許すはずがありません！」

「これは国家間の公式文書だ。そして、アルベド殿は魔導国の宰相位にあたる方。……言っている意味は分かるな？——衛兵たちよ、この層を牢獄に放り込め！」

そうして、フィリップは投獄された。

「あんな馬鹿に魔導国との交渉を任せればこの国は滅びるぞ。この国

を救えるのは俺しかないんだ、それがなぜ分らない……ああ、この国には馬鹿しかないからか……」

投獄されて間もない頃はザナツクに対する侮蔑の言葉を吐き続け、看守に自分の不当な境遇を改善するよう訴えていたが耳を貸す者はいない。

凍える牢獄の寒さは徐々にフィリップの体力と思考力を奪っていった。

(まさか、俺は……このまま死ぬのか?)

死を身近に感じたとき、フィリップは初めて自分が地に堕ちたことを自覚した。魔導国の後ろ盾を失い、貴族位を奪われた自分には何も残されていない事に。

絶望が心を蝕み、生きる気力すら奪っていく。絶望を受け入れれば、緩やかに死を迎えられただろう。

だがフィリップは抗った。生きるため、彼に唯一残されたものに縋る。

フィリップに残された唯一のもの、それは「憎悪」だった。

(このまま死んでたまるか! このような目に合わせたあいつに……思い知らせてやるまでは)

それからは幾通りもの復讐の手段を考えては妄想の中でそれを実行し、暗い喜びを生きる糧とする日々が続いた。

ある日、変化が訪れた。

最初は幻聴だと思った。しかし、耳を澄ませばどこからか囁くような声が聞こえてくる。

きよろきよろと周りを見渡してみる……が、誰もいない。再び妄想の世界に戻ろうと項垂れたとき、それは足元に拡がる己の影からはつきりと聞こえてきた。

——『憎いか』と。

一月後。

リ・エステイーズ王国の王城にある謁見の間には主だった貴族が集まれ、第二王子ザナツクの戴冠式が執り行われていた。

通常であれば事前に周辺国家へ使者を送り国賓を迎えるのだが、このような情勢ではそれもできず式は慎ましいものであった。

この状況下で王位継承を行う理由は、フィリップの件が切っ掛けでザナツクの下に派閥が統合されたことが大きい。この機を逃せば派閥は必ず分裂するだろう。それゆえ強引に推し進められたのだ。

「——囚人ども、ラナー王女に感謝しろよ。釈放だ。めでたい日とはいえ、お前たちを釈放するのは反対意見も多かったそうさ。ラナー王女の御力でお前たちにも特別な恩赦が与えられたんだからな」

「……………」

牢が開かれフィリップは牢獄を出る。彼の派閥に属していた者たちも姿を見せたが、もはや視線を交わすことも無く無言のままだった。

ここを出たところで領土も貴族位も剥奪されているのだ。生きていくことさえ困難だろう。恩赦と言われても感謝の気持ちなど微塵も沸いてこない。何よりも、今はある目的の事で頭がいっぱいだっ

た。
(外に出たら……次は宮殿だったな)

影からの声に従い行動を開始する。

あの声は何者なのかはどうでも良いことだ。自分の目的に協力する者ならば、神だろうが悪魔だろうが利用するだけだ。

王城内の物々しい警備を眺めながらふらふらとした足取りで歩いていくと、やがてヴァランシア宮殿が見えてくる。

宮殿前から王城の城門へ続く通路には兵士——元戦士長配下の精鋭が、その両脇には方を超えるほどの民衆がひしめき合い、新しい王が姿を見せるのを待ち侘びている。

フィリップは周囲の民衆を見渡しながら声を殺して嘲笑った。

(愚か者どもめ、俺に任せていれば幸せに生きていられたものを……もう、遅いがな)

民衆の事を考えたのも一瞬の事。即座に思考の隅へと追いやると、

恐怖に慄くザナツクの姿を想像して悦に浸る。

その時、宮殿の入り口付近から歓声が沸きあがった。フィリップの位置からは見えないがザナツクが姿を現わしたのだろう。

——突然、足を掴まれてびくつと身体を竦ませる。咄嗟に足下を見ると、そこには禍々しい造形をした像が落ちていた。

注意深く見回しながら、誰も見ていないことを確認して像を拾い上げると民衆を押し分けて前列に進んでいった。

間もなくザナツクが目の前を通る。こちらには全く気が付いていないようだ。

ザナツクの前に飛び出そうかとも考えたが、事を済ます前に取り押さえられては意味が無い。この場で実行することを決意する。

影の声に教えられた通りにゆつくりと像を天に掲げ、大声を張り上げる。

「——出でよ異界の者共！」

その声に反応して民衆の視線が集まるが、意に介さずにもう一度復唱する。

——何も起きない。

「な、なぜだ!? い、出でよ異界の者共！」

もう一度繰り返したが……やはり、何も起きない。

不信な行動をとるフィリップに兵士が近づいてくるのが見えた。不安に駆られて全身から汗が吹き出し、顔が青ざめ始めたとき、ようやく通路の中空に異変が顕れた。

フィリップは身体力が抜け、緊張感の欠片も無い安堵の溜息を吐いた。

ザナツクは突如前方に出現した——地に、中空に計六つの——黒い穴を見て歩みを止めると、傍の兵士に「何事か」と問いかけた。

兵士も事態を把握していない様で返答に困っている。

もしもこの時、脇目も振らずに逃げていれば、ザナツクは直後の悪意からは逃れられただろう。

だが、そうはならなかった。

「戴冠おめでとうございます、ザナツク王……良い夢は見れましたか？」

聞き覚えのある、悪意が籠められた声に反応してそちらへ振り向くと、禍々しい像を掲げるフィリップの姿が視界に入った。

すぐにフィリップの持つ像に気づくと驚愕に顔を歪めた。

——馬鹿な！ 有り得ない！

あれは宝物庫で嚴重に管理されていたはずだ。だが、今はそれどころではない。

頭に浮かび上がる疑問を振り払い、ザナツクは喉が裂けんばかりに絶叫する。

「衛兵！！ 早く、早くあいつからあの像を取り上げろ！！」

「もう遅い！ くくっ……くはははははっ！」

ザナツクが叫び、フィリップが狂ったような笑い声を挙げると同時に穴からおびただしい数の悪魔が飛び出す。

悪魔は取り囲んでいた衛兵たち——そしてフィリップに襲い掛かった。

犬のような悪魔——グレイター・ヘルハウンド上位地獄の猟犬数体に四肢を噛み千切られてもフィリップは笑い続け……そして、完全に絶命するまで彼の嘲笑は辺りに響いていた。

「オオオオオオオオオオオオン！」

三メートルにも及ぶ巨体に山羊の頭蓋骨を頭部に持つ悪魔——スケイル・デーモン鱗の悪魔が吠える。恐ろしいことに、それぞれの穴からは同種の悪魔が頭れてその数を増していく。

「ザナツク王！ お下がりにください！」

戦士長配下の兵士たちが悪魔の群れを押しとどめようとザナツクの前に壁を作るが、スケイル・デーモンがその手に持つ巨大な大金槌モールを横薙ぎに振ると、兵士たちは血反吐を撒き散らしながら周囲に吹き飛ばされた。

生暖かい血飛沫がザナツクに降りかかり、周囲の音が小さくなっていく。眼前の光景はある意味幻想的で、現実感を希薄なものへと変え

ていく……ザナツクは現実逃避に陥っていた。

父とは違う強い王を目指し、王国に蔓延る膿を取り除き、この国をより良きものに変える……それは届かないと思っていた『夢』だった。兄には力で劣り、妹には知恵で劣る、小賢しく根回しするだけの非才な自分に巡って来た千載一遇の機会。全てはこれからだった。

それなのに――

「あつ、あんなカスに!! こんなところで!!」

気付けばザナツクは惨状に背を向けて、宮殿の入り口目指して必死に走っていた。幾人もの兵士がザナツクの身を守ろうと悪魔の前に身を投げ出すが、次々に現れるスケイル・デーモンの群れに薙ぎ払われ、叩き潰されていく。

それでもザナツクは息を切らしながら走り続けた。生涯これ程必死に走ったことは無いだろう。

宮殿までの僅かな距離が異常な程遠く感じる。鈍重な小太りの身体が恨めしいが、日頃の不摂生を悔やむ余裕など無い。

後、四十メートル……三十メートル――

(もう少しだ!)

ふと、宮殿のバルコニーに立つ人影が視界に入る。そこには澱んだ眼でこちらを見下ろすラナーがいた。

視線を交わした刹那――ラナーは僅かに微笑んだ。

ザナツクは理解した。

「お、お前が――」

だが、そこまでだった。

空から降って来たスケイル・デーモンの一体に踏み潰されて、ザナツクの生涯は幕を閉じた。

フリリップが掲げた六つの宝石が付いた禍々しい悪魔の像――それはヤルダバオトが同族である悪魔が封じられていると言っていたものだ。

千切れた右手には未だその像が握られていた。六つの宝石それぞれに第十位階魔法へ最終戦争・悪^{アーマゲドン・イビル}が込められた像は使用した時点で

消滅するのだが、その事実気づいたのは像を使った者だけだった。
(――なるほど、一度使うと消えてしまうのね)

この時のためにラナーは手製の模造品――あまり似ていなかったのだが――を準備していたのだ。フィリップに渡した像はその模造品であり、本物は先ほどラナーの手から消え失せた。

ここまでは計画通りだ。後は模造品をシャドウ・デーモンに回収させ、自分はこの場を生き延びれば良い。

手持ちの鞆の中にある小箱をそつと確認する。封印は未だ解除されておらず、ラナーは溜息を吐いた。

(……まだ足りないようね。もつと頑張ってもらわないと)

ラナーは眼下に拡がる光景を一望する。雲霞の如く押し寄せる悪魔たちは個々の力も強く、武装した兵士でさえ貴族や民衆と同様になす術もなく喰らわれ、引き裂かれている。地面は血の海と化し、地獄絵図という言葉が相応しい情景であったが、ラナーの心には何の痛痒も齎さなかった。

そろそろここも危ないだろう。何しろ悪魔たちは召喚したラナーにも制御できないのだから。

(お兄様、今までありがとうございます。それと……こちらは『お疲れ様』かしら)

心の中で呟くと、ラナーは蹲る父親に向き直る。

「お父様、ここも危険です。早く逃げましょう」

父――前国王ランポツサ三世の顔色は死人のように白く、眼は虚ろでぶつぶつと意味を成さない言葉を呟いている。恐らく心が壊れたのだろう。長く苦しい時代を耐え抜き、ようやく訪れた息子の晴れ舞台から一転、地獄に叩き落されたのだから。

前王の様子に気づいた戦士長配下の兵士たちがラナーに声を掛ける。

「ラナー様、陛下は我々がお連れしますので先に御逃げください」

「……分かりました。申し訳ありませんが、父の事を宜しく願います」

既に役割を終えた父に用は無い。生きていれば使い道はあるが、今

は足手まといでしかない。

父を兵士たちに押し付けると、連れの者たち——クライムとブレイン、そして武器も持たないドレス姿のラキユース——に告げる。

「皆さん、王族専用の脱出路が宮殿内にありますので、そこから王城の外に出ましょう」

「畏まりました、ラナー様。命に代えてもお守り致します」

クライムの言葉にブレインとラキユースは厳しい表情で頷くと、ラナーに続いて部屋を後にした。

その頃、イビルアイとガガーランは拠点である宿で寛いでいた。

「何がめでてえんだか。そこいらのしけた顔みりや分かりそうなものだがなあ……このご時世にパレードなんて頭おかしいんじゃないか？」

「儀式だからな。だが危険を覚悟で決行するザナツクという者はなかなか豪胆な王になるかもしれんぞ」

イビルアイの物言いにガガーランは無然とした顔で口を開く。

「……まあな。宮廷内の派閥をまとめたみてえだし、少しは骨のある奴なんだろうよ。だが、国政が良くなるとは思えねえ。結局、派閥割れして前国王の時と同じになるんじゃないやねえか？ それどころか、意地張って魔導国の援助を打ち切ったりしたら目も当てらんねえぞ」

「それは考えているだろう。今まで通りの民衆を苦しめるやり方は、民衆を救っている魔導国に喧嘩を売るようなものだ。同盟を組むのも属国に下るのも、まずは支配者として優秀であることを示さねばな。帝国と竜王国の支配者は変わらさずだったが、王国がそうなるとは限らんしな」

いつもと違ってガガーランをイビルアイが宥める形だ。ガガーランは弱い者に肩入れすることが多く、国内の事情を重く考えているのだろう。

と、そこへテイナが扉を蹴破る勢いで中に入って来た。

「緊急。王城に悪魔が現れた」

「なんだと！ ヤルダバオトか!？」

ティナとイビルアイの言葉に周囲にいた冒険者たちも反応する。

「いや、宝物庫に保管されていたアレが使われたかもしれない。……城壁の上から見てたから遠目で確定ではないけど、使ったのは人間。そして真つ先に襲われて死んだ」

あれは嚴重に保管されていたのではなかったのか。王国の余りにもずさんな危機管理に怒りが込み上げる。

「それで、ラキユース達は無事なのか？」

「今のところは多分無事。新しい方の国王は殺されたけれど、ラキユース達は宮殿内にいたから王族の抜け道で脱出しているところだと思う。そっちはティアが向かってる」

「そうか……ならばどうするか。悪魔どもはここら辺りまで押し寄せてきそうか？」

表情が変わらないティナが珍しく重い表情を浮かべる。

「来る。数は千以上。群れを纏めるボスのような存在がない分、ヤルダバオトの時よりやばいかも……」

イビルアイは戦慄する。ヤルダバオト程の存在はいないだろうが、メイドと同程度が複数いる可能性は否定できない。

「ラキユースの装備はここにあるから脱出後はここに来るはずだ。我々は出来る限りここを守ろう。ティナ、今のうちに冒険者組合と連絡をとってくれ。それと……ガガーラン、平民たちの避難は後回しだ」

ガガーランが苦い表情を浮かべ渋々頷くと、ティナが意見する。

「イビルアイ、我々だけでは対応できない可能性が高い。モモンさんに現状を伝えて助けを求めろべき」

この緊急事態にできる限りの手を打つのは当然のことだ。恐らくこの場にいる者は同じ想いを抱いただろう。そして、今モモンに救援を求められるのは自分しかないのだ。

「ああ、そうだな。モモンに伝えたらすぐに戻る……と、言いたいところだが、転移の魔法は多くの魔力を消費するので戻るのに少し時間が掛かるぞ。それまで持たせてくれ」

「任せとけ。それと、お前たちも今回は無理しねえで生き延びることを優先しな」

ガガーランが周りの冒険者たちを見回すと、彼らは一斉に動き出した。